

筑後川の水神祠群に着目した

人々の暮らしと川との歴史的関係性の読み解き



2012年

九州大学工学部

地球環境工学科

建設都市工学コース

平野 哲也

2012.2.27

植田明



目次

第一章 序論

1.1 本研究の背景と目的	2
1.2 既往研究	3
1.3 研究対象	4
1.4 研究の構成	7

第二章 研究方法

2.1 調査概要	10
2.2 調査内容	11
2.3 分析概要	12
2.4 分析方法	13

第三章 研究結果

3.1 調査結果	
3.1.1 分布	15
3.1.2 年代	18
3.1.3 祭神	19
3.1.4 祭祀の形式	21
3.1.5 管理	24
3.2 分析結果	
3.2.1 集落立地との関連	27
3.2.2 渡しとの関連	35
3.2.3 川港、筏場、筏宿との関連	54
3.2.4 潬、淵との関連	59
3.2.5 築堤、掘削との関連	65
3.2.6 破堤箇所、決壩箇所、堆積地域、侵蝕地域との関連	75
3.2.7 分析結果のまとめ	80

第四章 結論

4.1 本研究の結論	83
4.2 今後の課題	85

付録

謝辞

第一章 序論

第一章 序論

1.1 本研究の背景と目的

筑後川は九州最大の一級河川であり、治水の歴史や水利用において重要な役割を担ってきた。流域内には、上流部に日田市、中流部に久留米市および鳥栖市、下流部に大川市及び佐賀市などがあり、九州北部における社会、経済、文化の基盤をなすとともに、古くから人々の生活、文化と深い結びつきをもっている。中流部では、九州を代表する穀倉地帯である筑後平野を緩やかに蛇行しながら流れ、多くの恵みを筑後平野に与え、生産性の高い農地を形成してきた¹⁾。

しかし、洪水の氾濫時に、上流から運び込まれて堆積した土砂によって形成された自然堤防上に村や耕地が位置しており、平水位より微高地になっていたため、大河川の筑後川が側に流れているにも関わらず農業用水の確保が不可能であった²⁾。このような地域で筑後川を利水として利用するため筑後川四大取水堰や用水路が建設された。一方で、筑後川は利根川（坂東太郎）、吉野川（四国三郎）とともに筑紫次郎として「日本の三大暴れ川」に名を連ねるほど大水の被害が多い河川であり、その流域は度々水害に悩まされてきた。藩政初期に行われた瀬ノ下新川の開削をはじめ、明治19年には第一期改修計画の金島、小森野、天建寺、坂口の4放水路の開削が行われ、筑後川の蛇行を直流化するショートカット工事が各所で行われてきた。また、寛永年間に千栗堤防、安武堤防が築造され、当時は有馬藩、鍋島藩の水防上重要な堤防であった³⁾。高度な技術がない中で、暴れ川に挑戦した先人たちの知恵と気概には敬意を払わざるを得ない。

これらの現存する堰や用水路等の利水・治水施設は、今まで筑後川と人との関わりの歴史を伝える大切な遺産であり、これにより形作られた河川景観は地域の大きな特徴となっている。このような遺産を後世に伝えていくことが今後の景観設計で必要とされている。

こうした景観設計を行うためには河川空間の歴史を理解することが必須である。その手段として、現存する歴史的河川構造物を手掛かりに読み解いていくことが考えられる。それらの河川構造物により形づくられた空間や、構造物にまつわる多くの史実より対象地域について理解することが可能である。

しかし、過去人々の暮らしで利用してきた船着場や水汲み場といった日常的な川との関係性を伝えるものは生活の変化に伴い河川空間から現在失われてしまった。また、参考となる資料も少ないため、過去の河川空間について理解するための手掛かりが少ない状況にある。

そのような中で、筑後川沿川には多くの水神祠が祀られていることが確認できる。水神祠とは、水神が祀られている小さな祠のことで、これらの水神祠は、人々の水に対する恩恵と恐怖が神格化し、諸神仏に仮托して信仰という形をとて引き継がれてきたと考えられる⁴⁾。本研究では筑後川沿川に多数分布する水神祠を例とし、その立地要因の考察を行うことにより、筑後川と流域に住む人々との歴史的関係性の読み解きを行う。

1.2 既往研究

これまで色々な川で水神信仰と地域との関係性についての研究が多数行われている。

川は古来から、我々の日常生活に強い影響力を持ち、川と人間生活との関連は地表に様々な形態で露出している。矢澤は、この川と人間生活との関連の一側面を考えるための一つの指標として、静岡県中央部に流れる大井川流域に多数分布する大井神社を例とし、その立地要因の考察を行うことにより、大井川と流域に住む人々との関連および流域の地域性を明らかにした。大井関係神社の立地要因は、同じように「大井」を名のる神社であっても、細かな地域性を反映して、地域ごとに少しずつ異なっており、それは、大井関係神社を祀った住民の切なる願いが地域の様々な個性により違っているからであることを指摘した⁵⁾。また、西谷・真田らは、人々と自然環境の関わり方の一端が神社の立地に表れているとして、吉野川沿川の神社立地の特徴について、主に地形との関係に着目した。吉野川全体における神社の分布状況は、集落のある沖積平野に散在しつつも、山裾や段丘の縁に作られた里道に並ぶように建つ神社があることを明らかにした⁶⁾。

筑後川のある筑後地方では、古くからの祭礼が各地に残るとともに、水神、河童に関する伝説が多く伝承され、人と川との関係の深さがうかがえる。筑後地方の水に関わる民間伝承として水神、河童伝説に着目し、地理的特性について考察した研究として、上田・菊池らの研究⁷⁾がある。この中で、上田・菊池らは、筑後地方での民間伝承は、まさにこの土地の特徴や住民の生活を映し出しており、民間伝承が生活の一部として伝承されてきたとしている。このことから水神祠の立地について研究することは、その土地における人と川との関係を読み解くことといえる。

本研究では、水神信仰、河童伝説が数多く伝承されているとされる筑後地方を流れる筑後川に多数分布する水神祠に着目して、これまで営まれてきた人々の暮らしと川との関係性について、水神祠の立地要因の考察を行うことで読み解いていく。

1.3 研究対象

本研究の研究対象は、筑後川沿川に分布する水神祠とした。水神祠とは、祭神として水に関する神を祀っている祠や、御神体とする石に水神の名称を刻まれて祀られているものとする。写真 1.3.1 のようなものを対象としている。

今回の調査では筑後川現河道および上流支川の沿川を中心に現地調査を行い、調査で目視確認できた水神祠のみを研究対象とした。本研究で目視確認した水神祠の他に、水神祠が過去に祀られており、水害により紛失、河道改修による移設された可能性も考えられるが、本研究では現存している水神祠を研究対象とした。

図 1.3.1 に示すように、研究対象とした河川は、筑後川、筑後川上流の支川にある三隅川、庄手川、玖珠川である。三隅川は花月川と合流することで筑後川という名称になり、庄手川は三隅川から分流する川である。玖珠川は三隅川の上流で、大山川と合流して三隅川という名称になる。主に図 1.2.1 に示す範囲を対象に水神祠の立地調査およびヒアリング調査を行った。

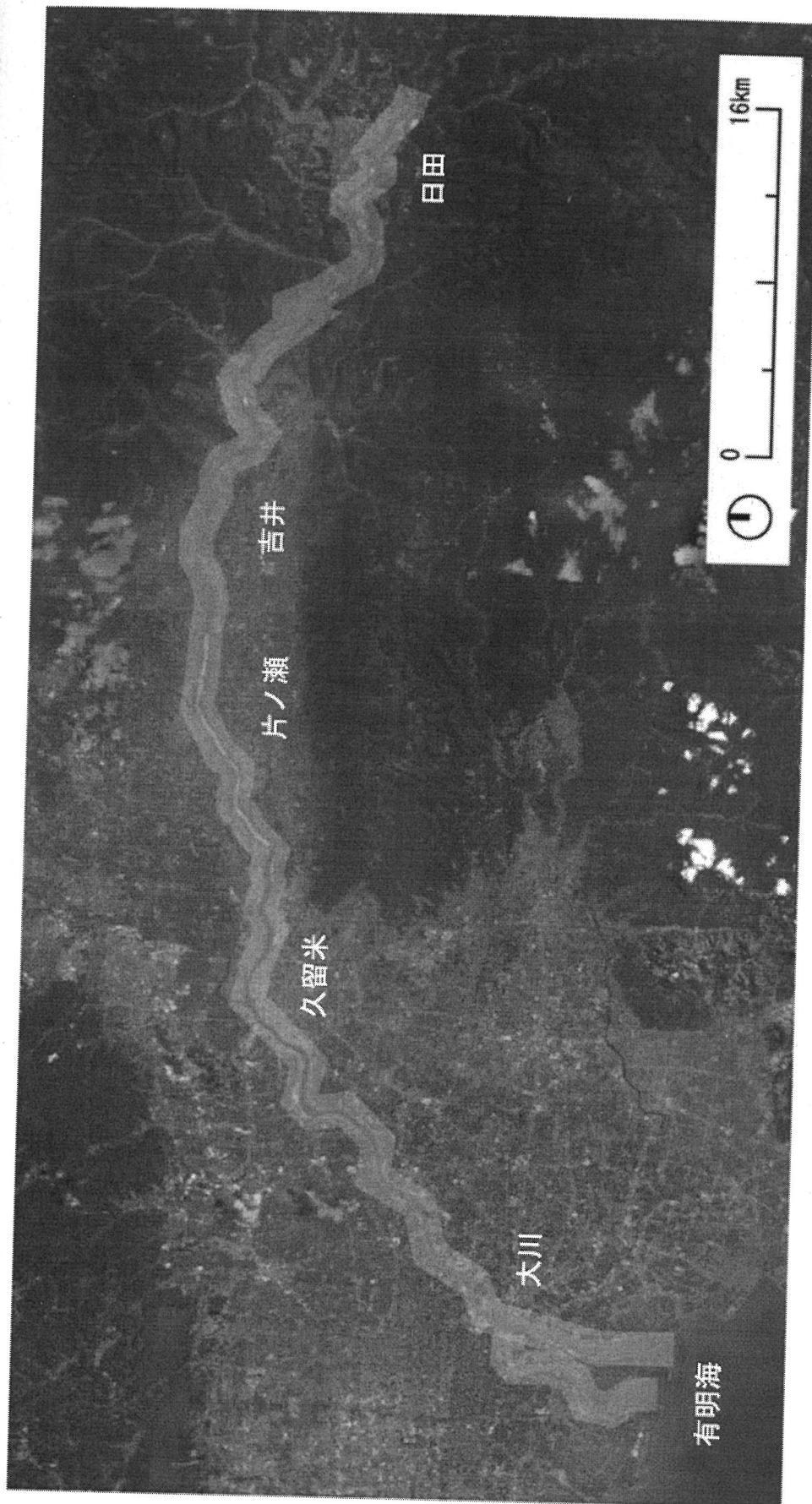


図1.3.1 研究範囲

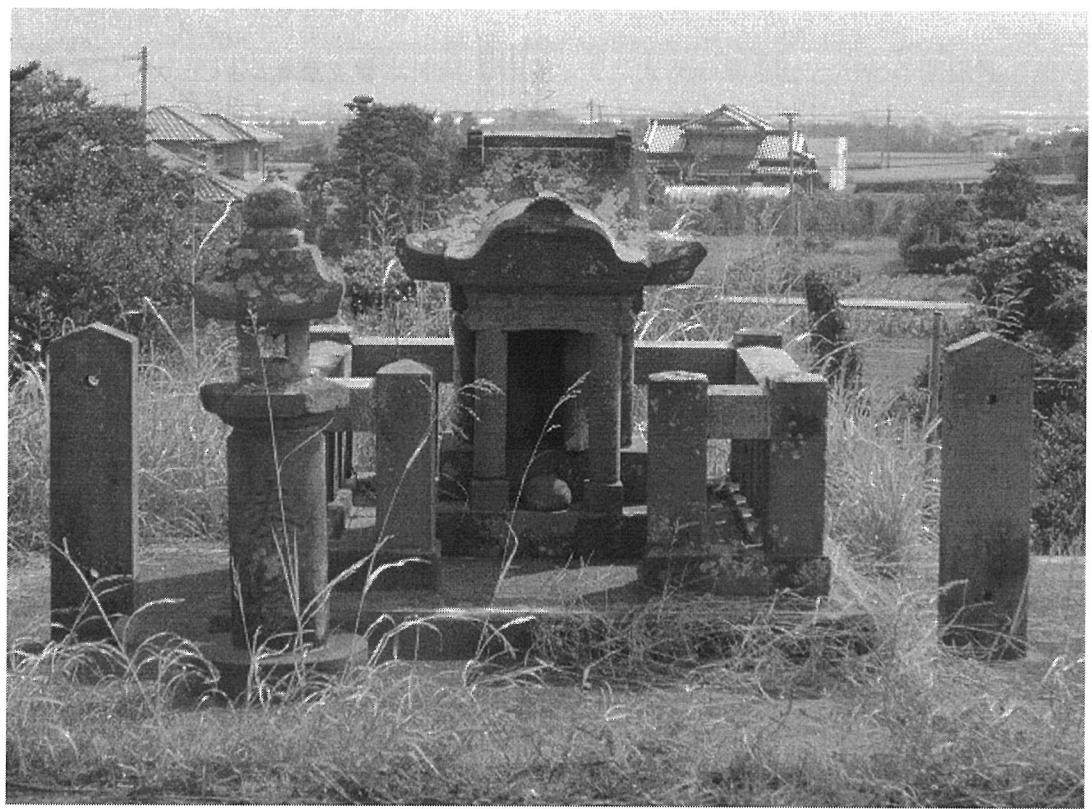


写真 1.3.1 大窪に立地する水神祠

1.4 研究の構成

本研究は、筑後川に分布する水神祠に着目して、人々の暮らしと川との関係性の読み解きを行うため、立地調査およびヒアリング調査により情報を収集し、それらの情報から分析することで、本研究から明らかになった事項について考察を加える。

第一章は、本研究の背景と目的および研究の構成について述べた。

第二章では、水神祠の情報収集するために行った現地調査、水神祠の立地要因を明らかにするために行った分析について本研究で行った研究方法をまとめた。

第三章では、第二章で得られた調査結果、分析結果について整理し考察した。

第四章では、本研究により得られた結果により、水神祠に着目することから、筑後川に住む人々と川との関係性の読み解きについて結論付けるとともに今後の課題について論じた。

第一章 参考、引用文献

- 1)筑後川河川事務所、筑後川流域基礎情報—筑後川ハンドブック—、pp.12.13、2004
- 2) 筑後川改修期成同盟会、筑後川流域利水対策協議会：筑後川の流れとともに 筑後川の利水と治水、pp.83、1996
- 3) 筑後川改修期成同盟会、筑後川流域利水対策協議会：筑後川の流れとともに 筑後川の利水と治水、pp.24、1996
- 4)津軽水神考 小館袁三
- 5)大井川流域における水神信仰の地域性 矢澤和宏
- 6)吉野川沿川における神社立地の特徴に関する研究 西谷宗泰 真田純子
- 7)筑後川流域における水に関わる民間伝承の地理的特性に関する考察 上田祥史 菊地成朋

第二章 研究方法

第二章 研究方法

2.1 調査概要

筑後川に立地する水神祠の分布は記録されておらず、どこに立地しているのかは資料から把握することができなかった。そこで現地で水神祠の立地を探索し、水神祠の立地情報を得るために立地調査を行った。ヒアリング調査は、筑後川に分布する水神祠に関する資料はほぼみつからなかつたため、水神祠周辺に住んでいる住民に水神祠に関する情報の聞き取りを行うためヒアリング調査を行つた。調査実施日は、平成 23 年 10 月 7、24、27、31 日、11 月 16 日、12 月 1、4、6、16、20、23、24、26、30、平成 24 年 1 月 6、7、8、9、12、15、16、20、21、23、28、29、30、31 日である。

2.2 調査内容

本研究では水神祠の立地調査と水神祠周辺の住民に対するヒアリング調査を行った。

水神祠の立地調査は、水神祠の立置情報が記録されていないため、筑後川流域に立地する水神祠を現地で目視確認し、以下の項目に関して記録した。

- ・ 立地場所
- ・ 刻印
- ・ 祭祀の形式

立地場所の測定は主に以下の GPS 機能を使用した。

- ・ GPS Tip : BCM4750 (Broadcom 社)
- ・ 測位方法 : A-GPS + 3G 基地局

刻印は主に建立年、祭神を調査するために水神祠に彫られている文字を記録した。

ヒアリング調査では、現地調査で確認した水神祠の周辺に住む住民に対しヒアリング調査を実施した。主なヒアリング項目を以下に示す。

- ・ 管理は誰がしているのか
- ・ 祭りは行っているか
- ・ 水神祠の謂れは何か

ヒアリング調査の対象者は水神祠の周辺に住む住民に対して無作為に対象を選定し聞き取りを行った。

2.3 分析概要

現地調査より、人々は水神祠に対し「水難除けのため」、「子供が水で溺れないように」という認識があることがわかった。しかし、本調査では水神祠の詳しい建立理由までは明らかにすることことができなかった。水神祠は古くから立地しているため、建立理由まで知る人が少ないとされるのが現状である。水神祠の立地要因は、その地域で生活する人々の暮らしの特徴と関係すると考えられる。そこで、水神祠の立地要因を明らかにするための分析を行った。

2.4 分析方法

本研究では、水神祠の立地要因を探るため、以下の分析を行った。図 2.4.1 はこの分析のイメージである。(1)集落、(2)渡し場、(3)川港/筏場/筏宿、(4)瀬/淵、(5)築堤/掘削、(6)破堤箇所/決壊箇所等の水害による被害の位置を地図上にプロットし、それぞれの分布図を作成した。その作成した分布図と水神祠分布図を重ね合わせ、水神祠との位置関係を確認した。この位置関係より水神祠の立地要因を推測した。

今回の分析では水神祠を年代に関係なくプロットした。その理由は、現地調査の結果から刻印された水神祠の年代以前から存在していた可能性が考えられるためである。本調査では詳細な建立年までは明らかにできなかったため、ここでは全ての水神祠が江戸時代以降存在していると仮定した。

① 現地調査

② 分析

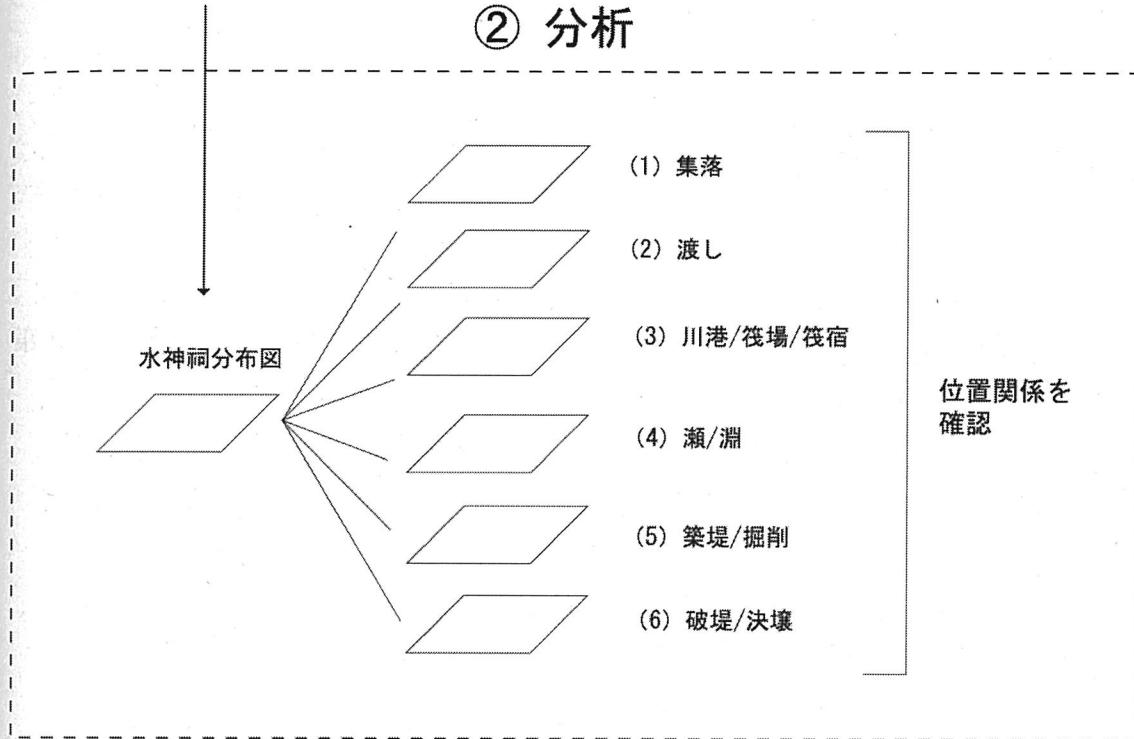


図 2.4.1 分析のイメージ

第三章 研究結果

第三章 研究結果

3.1 調査結果

3.1.1 分布

立地調査では 91 箇所の水神祠の存在が確認できた。今回の立地調査で確認した水神祠の位置を平成 14 年に国土地理院により作成された 2 万 5 千分の 1 の地形図にプロットし、水神祠分布図を作成した。図 3.1.1.1、は水神祠分布図である。

分布図より、筑後川下流域では水神祠が立地していないことが確認できる。この水神祠が確認できなかった下流区間は、筑後大堰ができる以前の感潮区間に相当、最大干満差約 6m におよぶ有明海の潮汐の影響を受けた地域である。また、水神祠は上流に多く分布し、日田に密集していることが確認できる。

地域によって水神祠の分布に違いがあることが確認された。

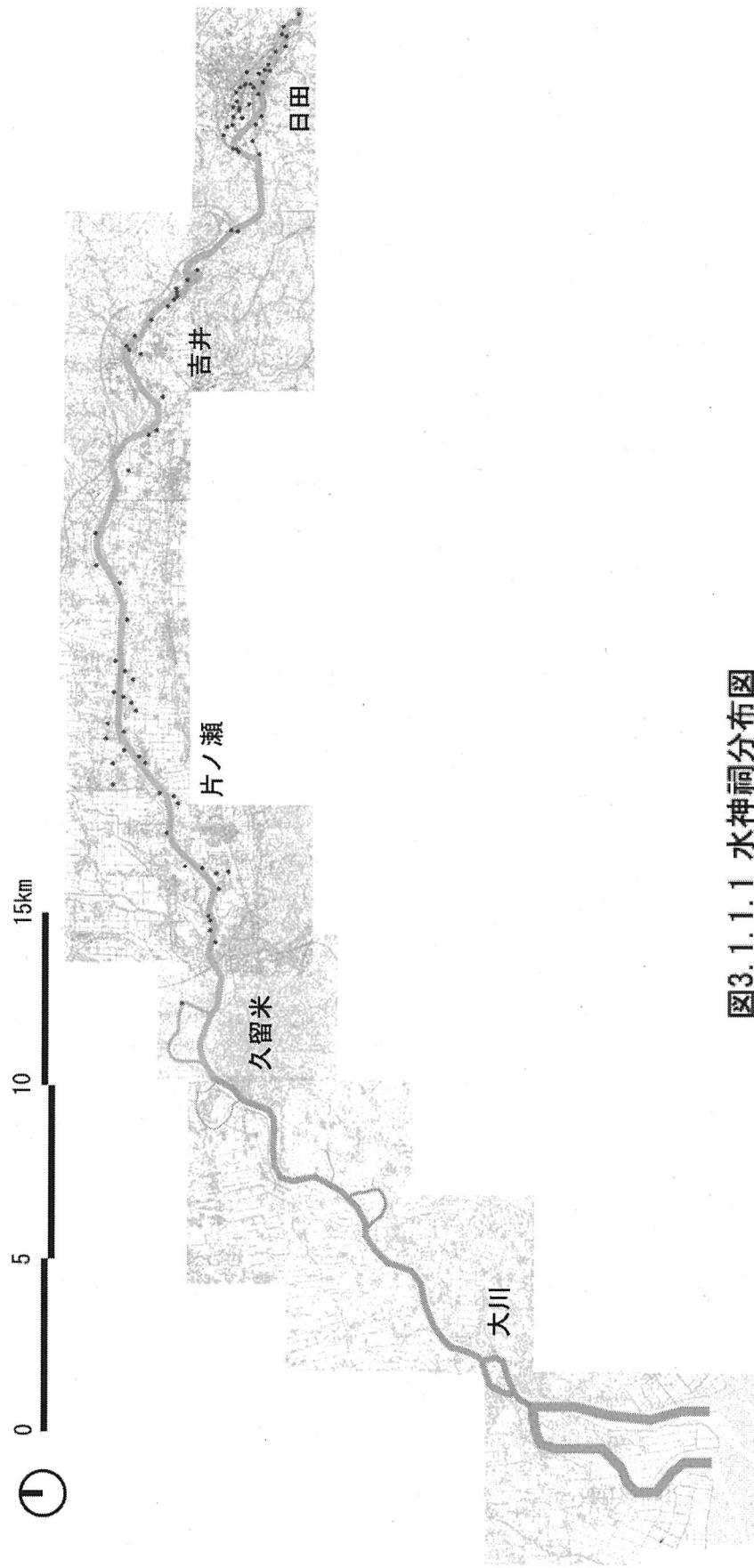


図3.1.1.1 水神祠分布図

3.1.2 年代

現在立地している水神碑に刻まれている年代、ヒアリングから確認できた年代をまとめた。年代を確認できる水神祠は 51 箇所であり、年代が刻まれていない水神祠、読み取れない水神祠が 40 箇所である。

年代が確認できる水神祠を時代ごとに分類した。江戸が 4 箇所、明治が 21 箇所、大正が 5 箇所、昭和が 18 箇所、平成が 3 箇所である。表 3.1.1 に円グラフを示す。

1 番古いことが確認できたのは、高島地区の「寛政十一年（1799）」であるが、この水神碑祠は交通事故により祠が全壊し、現在の祠は平成 18 年（2006）に再建されたものである。

この祠の中に全壊した祠の一部が残されており、それに「寛政十一」の刻印が確認できる。

次いで、有王社に祀られている、「文政二年（1819）」の水神祠がある。

一番新しい水神祠は川原町の平成 19 年（2007）の水神祠である。この水神祠に年代は刻まれていないが、川原町の発行している町内誌より建立年が確認できた。元々川原町が祀っていた水神祠は昭和 28 年の水害で流されて消失してしまったらしい。最近になり、あるお宅から以前に祠の中に祀っていた鏡が発見されたことがきっかけとなり再建されたことが確認された。

次いで、高島地区に再建された「平成十八年（2006）」の水神祠である。先に述べたように、ここの水神祠は交通事故により全壊し、再建されたものである。

水神祠は 1799 年から建立されてきたことが確認できた。また、年代が比較的新しいものは再建されたものが多いことから、水神祠は刻印の年代以前からその場所に存在していた可能性があることが考えられる。

3.1.3 祭神

本調査の水神祠では、「水天宮」という刻印が多く確認できた。水天宮とは久留米に総本山がある水にまつわる神社である。

水天宮は現在、天御中主大神とともに、安徳天皇、建礼門院、二位の尼を祭神として、水と子供の守護、水難除け、安産に関して人々が祈願して信仰されている。

筑後川には平家にまつわる伝承が多く、水天宮でも平家を水神として祭っている。水神と平家とを結び付けるに至った背景には、中世期以来、水神祭祀に奉仕していた巫女たちの活動があるといわれている。この巫女たちは恐らく、尼形のゴゼ姿であったため、尼御前と呼ばれたとされる。筑後川・巨瀬川などは古くから交通・運輸によく利用され、沿岸には河港や人々がよく集まる場所が形成されてきたと思われるが、このような所を転々と移動して水神祭りをやり、水難除けの護符を売りさばいたのが彼女たちであったに違いないとされる。水天宮が近世以前から確とした社地・祠堂を伝えず、その旧地・旧祠と称するものが広く分布しているのはこのためである。水神祭祀に当たって、巫女たちが人々の心を捉るために平家哀話を持ったとされる¹⁾。水天宮の本社は、慶安3年（1650）、久留米藩第2代有馬忠頼から今の社地を拝領するまでは、下野から久留米市内の2~3ヶ所を転々としている。水天宮は、徳川時代の政治的安定期に入り、藩水軍・藩米の大坂回漕・海路による参勤交代などのための水難除去をこの社に祈願した藩主や、船舶運輸に関係した商人、あるいは常に水害を忘れることができなかつた沿川村落民などの深い信仰を得た。人々、「尼御前社」と呼ばれていたが、文政元年（1818）、江戸に分霊されたところから「水天宮」の名が一般化したことが確認されている。筑後川水系下に水天宮が分霊されているのはほとんど幕末以降で、明治・大正期になると数は多くなり²⁾、また、「水天宮神徳記」という庶民向けの読み物には、水天宮のお守りの効力に関するエピソードが記載されており、庶民に広く水天宮信仰が広まっていることが推測される。

このように、多くの逸話が残される水天宮が立地している筑後川において、水天宮信仰が人々に広まっていると考えられる。今回の調査で、水神祠に「水天宮」の文字が確認されるもの、「水天宮」のお札が祭られている水神祠を水天宮信仰が確認できるものとし、その他に確認できる刻印とに分類する。複数の名称が確認されるものに関しては、今回は水天宮信仰があるかの確かめる分類のため、いくつかの名称がある中で水天宮の文字が確認できた場合は、「水天宮」が確認できる水神祠に分類した。

「水天宮」が確認できる水神祠は57箇所、「水神」の文字が確認できるものは9箇所、「水神社」の文字が確認できるものは4箇所、「水神天」が確認できるものは2箇所、確認できないものは19箇所だった。表3.1.1に円グラフを示す。

図3.1.3.1より、筑後川流域では水天宮信仰が普及していることが確認された。上流の日田に密集していることが確認できる。

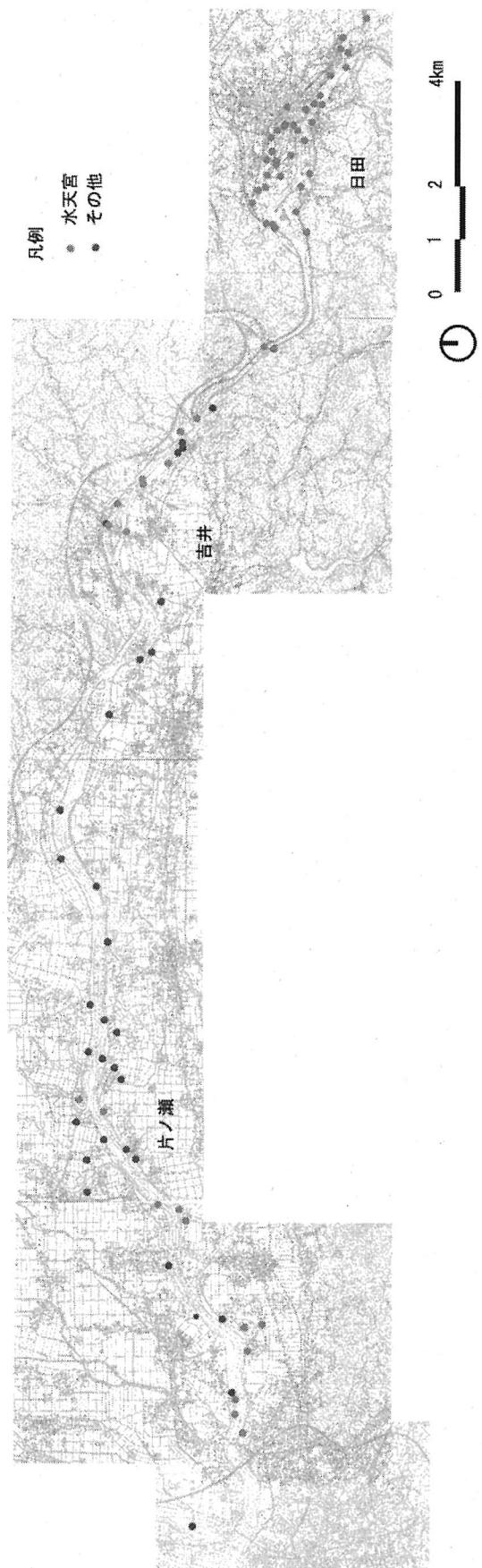


図3.1.3.1 祭神分布図

3.1.4 祭祀の形式

水神祠の造りが 2 パターンに分類できる。石やコンクリートで作られた祠の中に御神体を祀って祭祀されているものと、石に祭神の名称を刻み、それを御神体として祀られているものの 2 つで、それぞれ石と祠とする。写真 3.1.4.1 に石の形式の水神祠、写真 3.1.4.2 に祠の形式の水神祠を示す。

91 箇所のうち、祠が 45 箇所、石が 44 箇所、その他として木造のお宮を造っていたものが 2 箇所ということが確認できた。図 3.1.1.に円グラフを示す。

図 3.1.4.1 より、上流には石で祀られている水神祠が多く、下流になると祠で祀られているものが多いことが確認できた。このことから、地域によって、祠の祭礼と石の祭礼という目視で確認できるような違いがあることが明らかとなった。

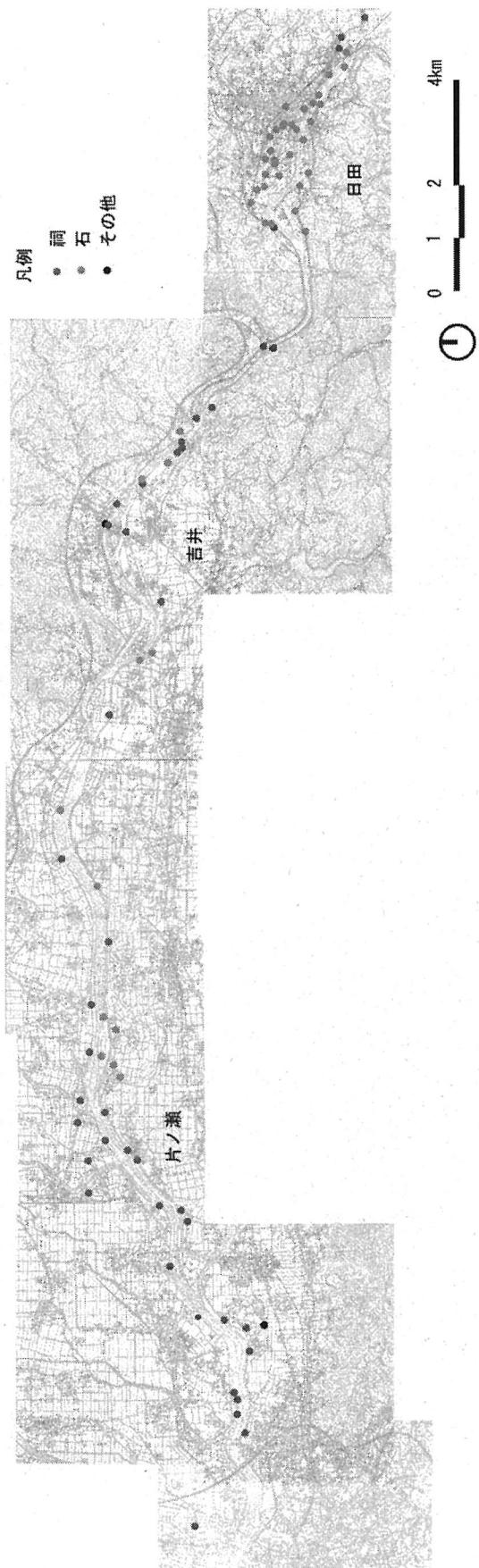


図3.1.3.1 祭祀の形式の分布図



写真 3.1.4.1 大宮に立地する石の祭祀の水神祠



写真 3.1.4.2 石崎に立地する祠の祭祀の水神祠

3.1.5 管理

91箇所の水神祠の管理は、集落の管理が80箇所、個人管理が3箇所、九州電力の管理が1箇所、床島堰土地改良区の管理が1箇所、かつて世話されていたが現在はされていない水神祠が4箇所、不明なのが2箇所である。表3.1.1に円グラフを示す。

多くの水神祠は集落により管理されていることが確認できた。また、水神祠は各集落で祀られ、管理が集落の住民に引き継がれていることが確認された。

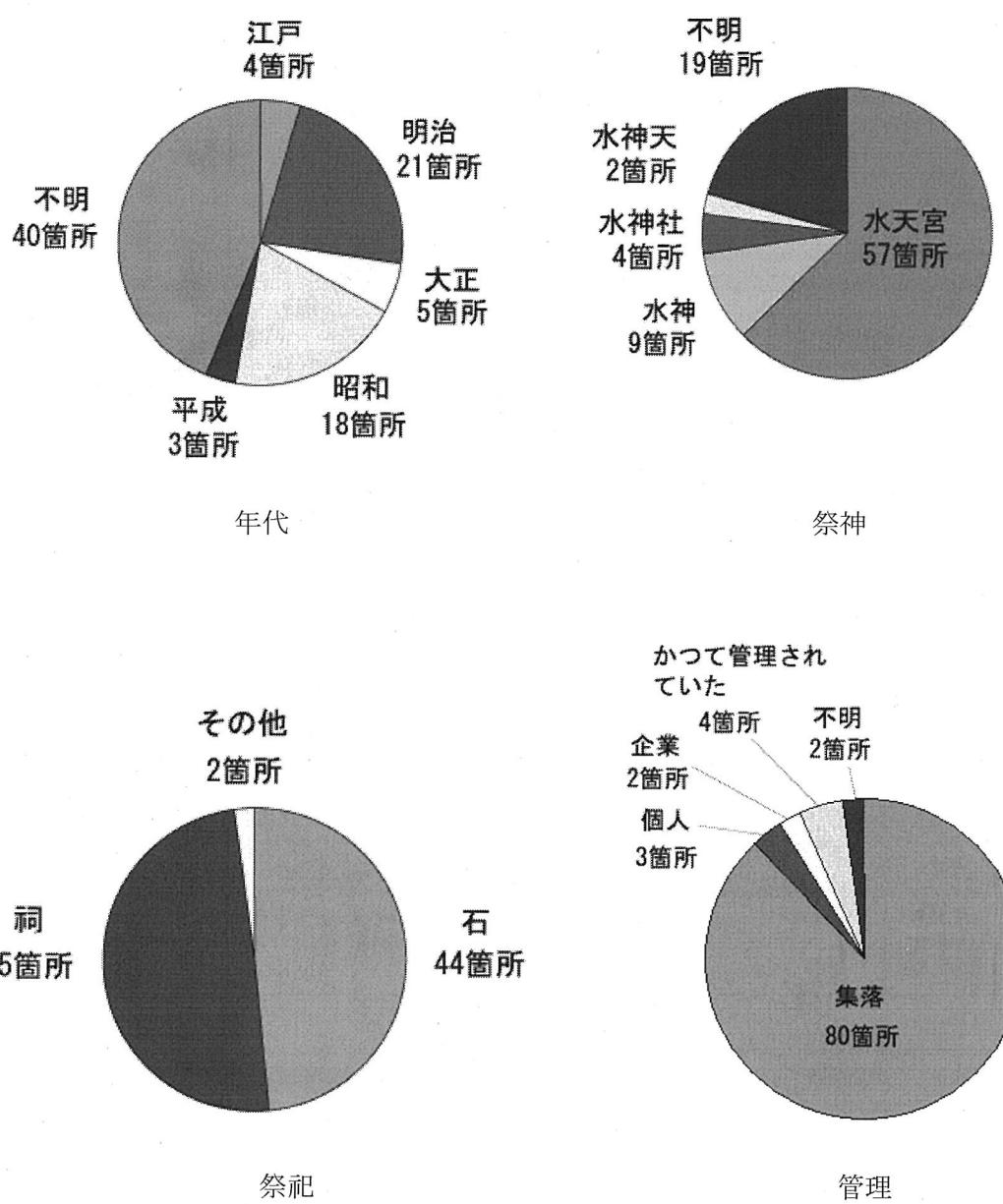


表 3.1.1 調査結果の円グラフ

第二章 参考、引用文献

- 1) 九州農政局筑後川水系農業水利調査事務所、筑後川農業水利誌、pp508、1977
- 2) 九州農政局筑後川水系農業水利調査事務所、筑後川農業水利誌、pp525、1977

3.2 分析結果

3.2.1 集落立地との関連

調査結果より、集落に管理されている水神祠は 80 箇所であることが確認された。その水神祠を管理している集落をプロットし、水神祠分布図と重ね合わせた。これは現在水神祠を管理する集落と水神祠の位置関係をみるためにある。図 3.2.1.1、図 3.2.1.2、図 3.2.1.3、図 3.2.1.4、図 3.2.1.5 に図を示す。

プロットした集落の周辺に立地していない水神祠が 13 箇所見られた。13 箇所を除く 79 箇所の水神祠は周辺に集落の立地がみられた。

79 箇所のうち 2 箇所が集落の近くにあるが管理されておらず、それを除く 77 箇所の水神祠は管理している集落が周辺に確認できた。このことより、水神祠の周辺の集落がそれを管理していることが確認された。集落の周辺に立地していない 13 箇所の水神祠を以下に整理する。

【2】個人宅で管理している。この水神祠がある辺り一体は梅山家が住んでおり、この水神祠も現在梅山家が管理してきた水神祠がある場所は梅山家の所有する土地であり、現在も梅山家により管理されている。

【13】製材所の敷地内に祀られている。古くから土地所有者により管理がされている。

【22】石井発電所の水路の沿いに立地しており、九州電力が管理している。九州電力が毎年 4 月頃にしめ縄を巻いて祀っている。

【36】刻印から昭和 63 年に道路拡張工事の際に現在の場所に移設されていることが確認できる。個人の敷地内にあり水神祠の立地する土地の所有者により管理されていたそうだが、現在は管理する人がいなくなっている。

【50】童子丸池に祀られている水神祠であり、少し離れて位置する橘田の集落が管理している。池にまつわる伝承も残されている。

【59】、【60】かつては近くに立地する沖野という集落が管理していた。昔は水神祠の近くに集落が位置し、漁業が行われた地域で、この水神祠の祭りも行われていた。しかし、漁業の衰退とともに水神信仰も薄れ、現在では世話する人々がいなくなった。

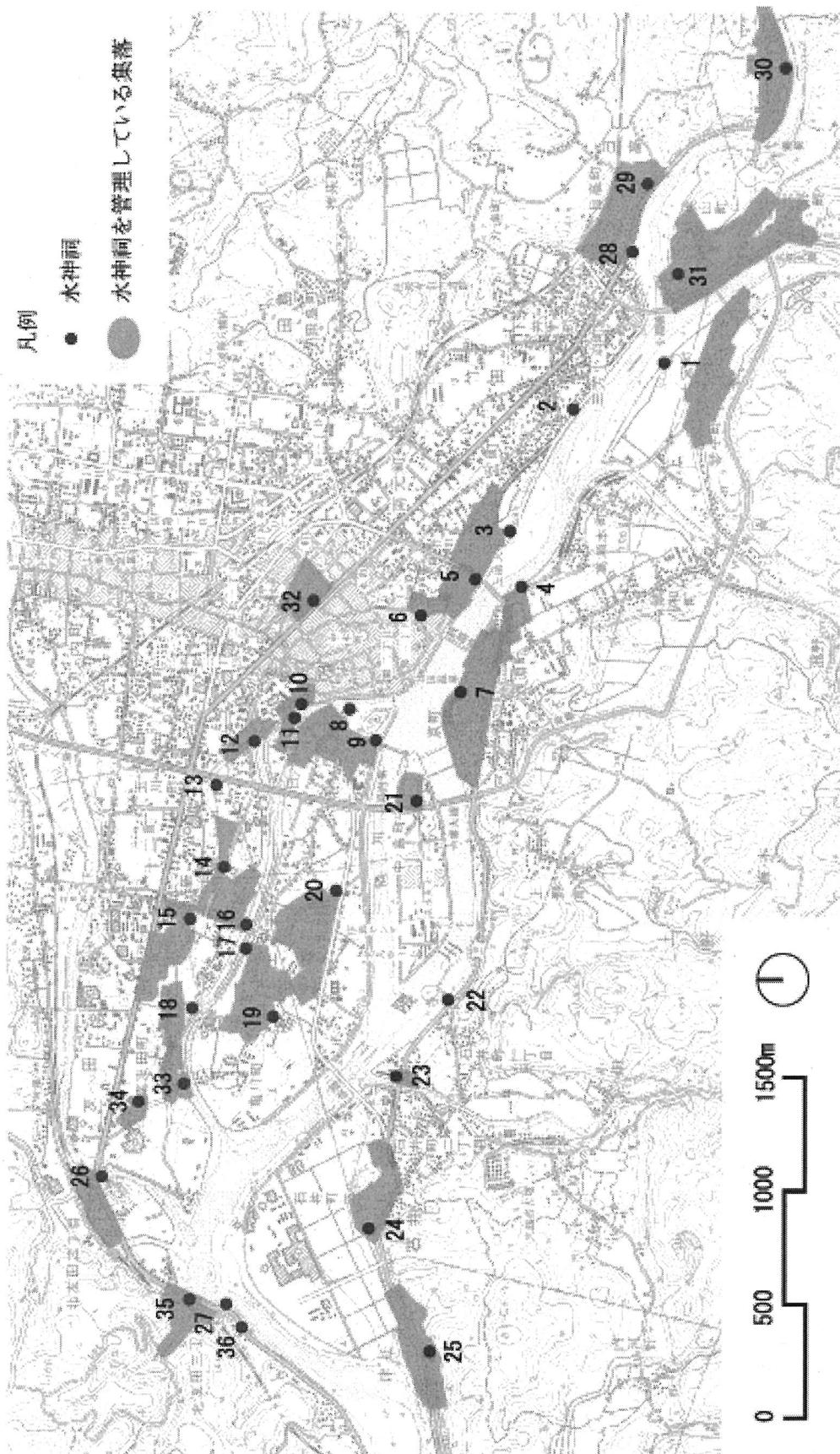
【65】用水路の上に立地しており、南部用水が完成したことで建立した。元々は近くの北野部落に住む用水委員の方々が管理しており、田植えの前に用水委員がこの水神祠にお参りしていたが、今はその人達もいなくなり管理は特に決められていない。現在、お供えや掃除は近くの砂利組合の方がしているようである。

【71】中という集落が管理している。集落から離れて立地している。この水神祠は元々、堤外地側の土地に立地されていたが、区画整理の際に現在の堤防の上に移設された。現在でも毎年この集落がお祭りを行い管理している。

【72】床島堰の操作室の横に立地しており、床島堰土地改良区が管理している。

【79】畠の中に立地する水神祠であり、管理は周辺の3つの集落により管理されているそうで、毎年各集落の区長がお祭りをしているそうである。この水神祠の謂れば文献より、鯰久保新川の掘替功労者を祀る水神社であることが確認された。

【84】、【87】は本調査では確認できなかった。



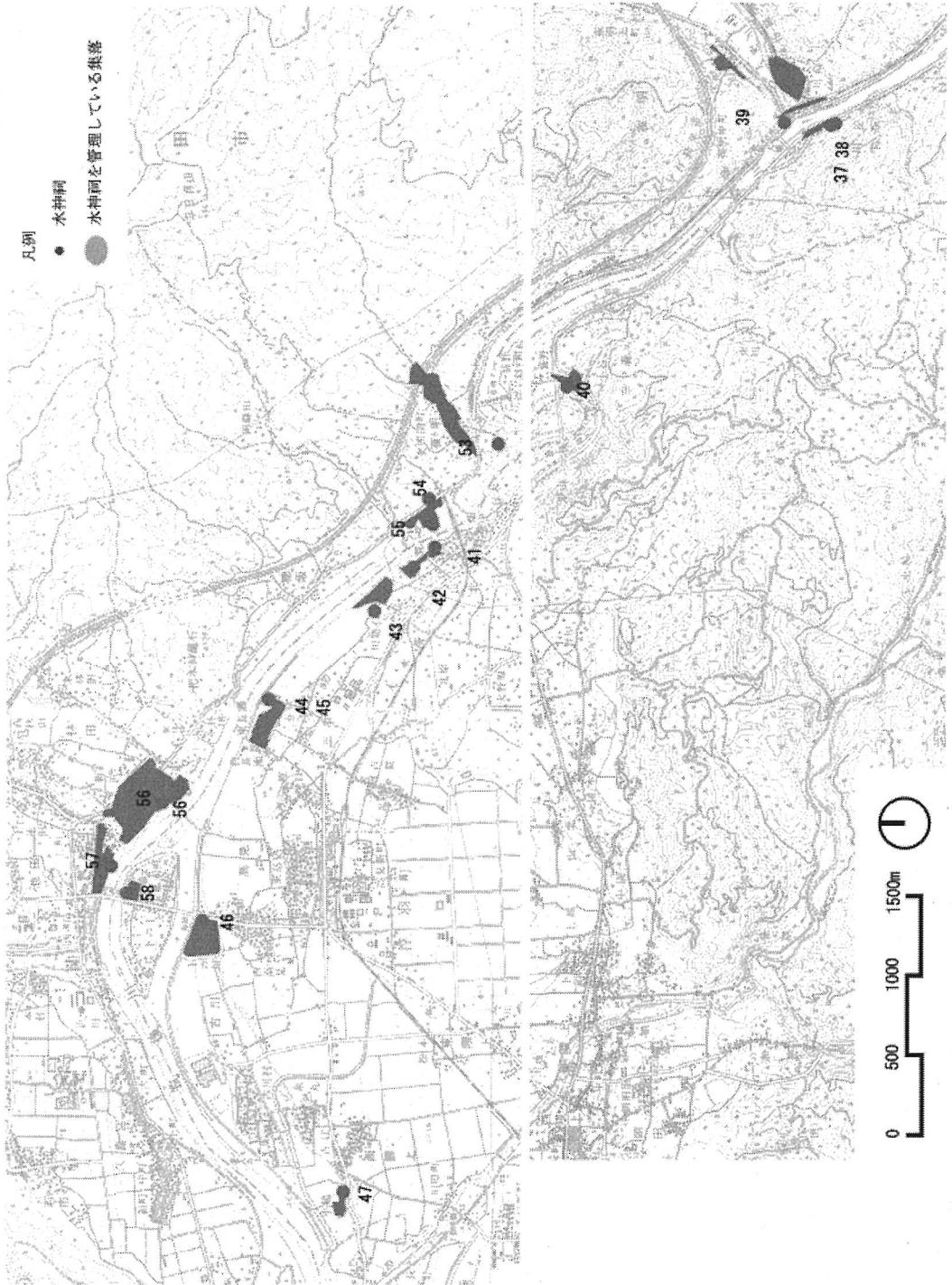


図3.2.1.2 集落との関係性

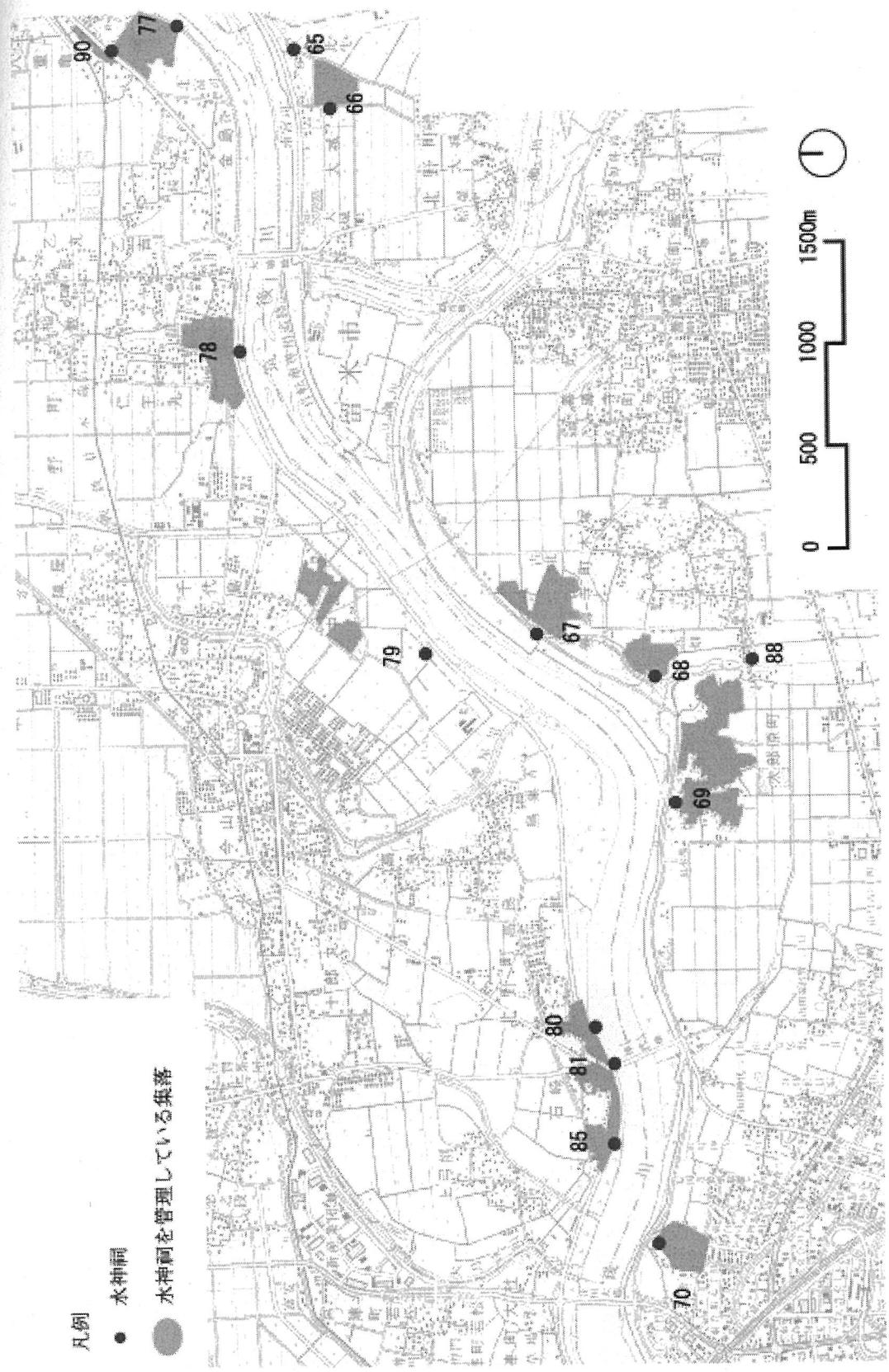


図3.2.1.3 集落との関係性

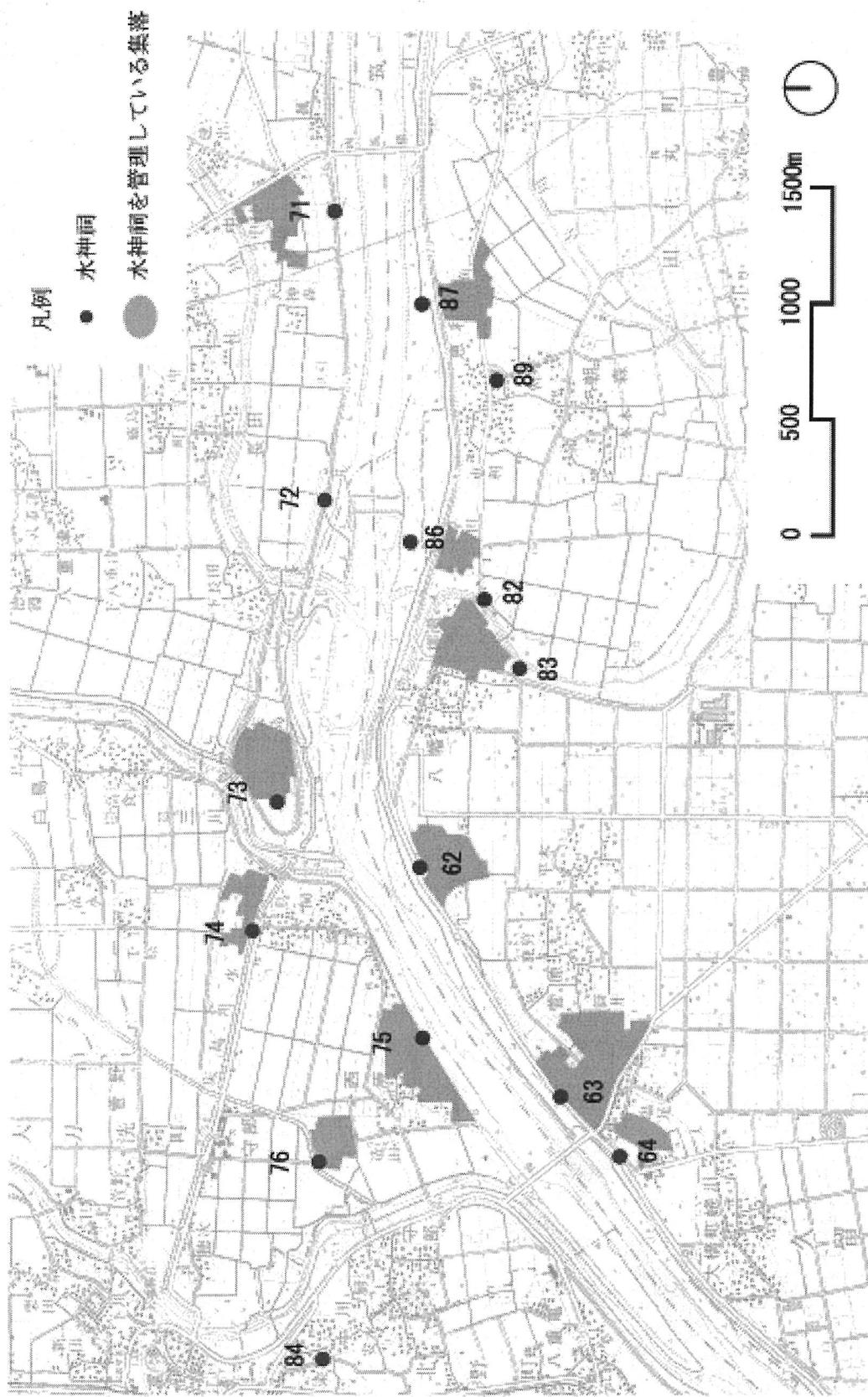


図3.2.1.4 集落との関係性

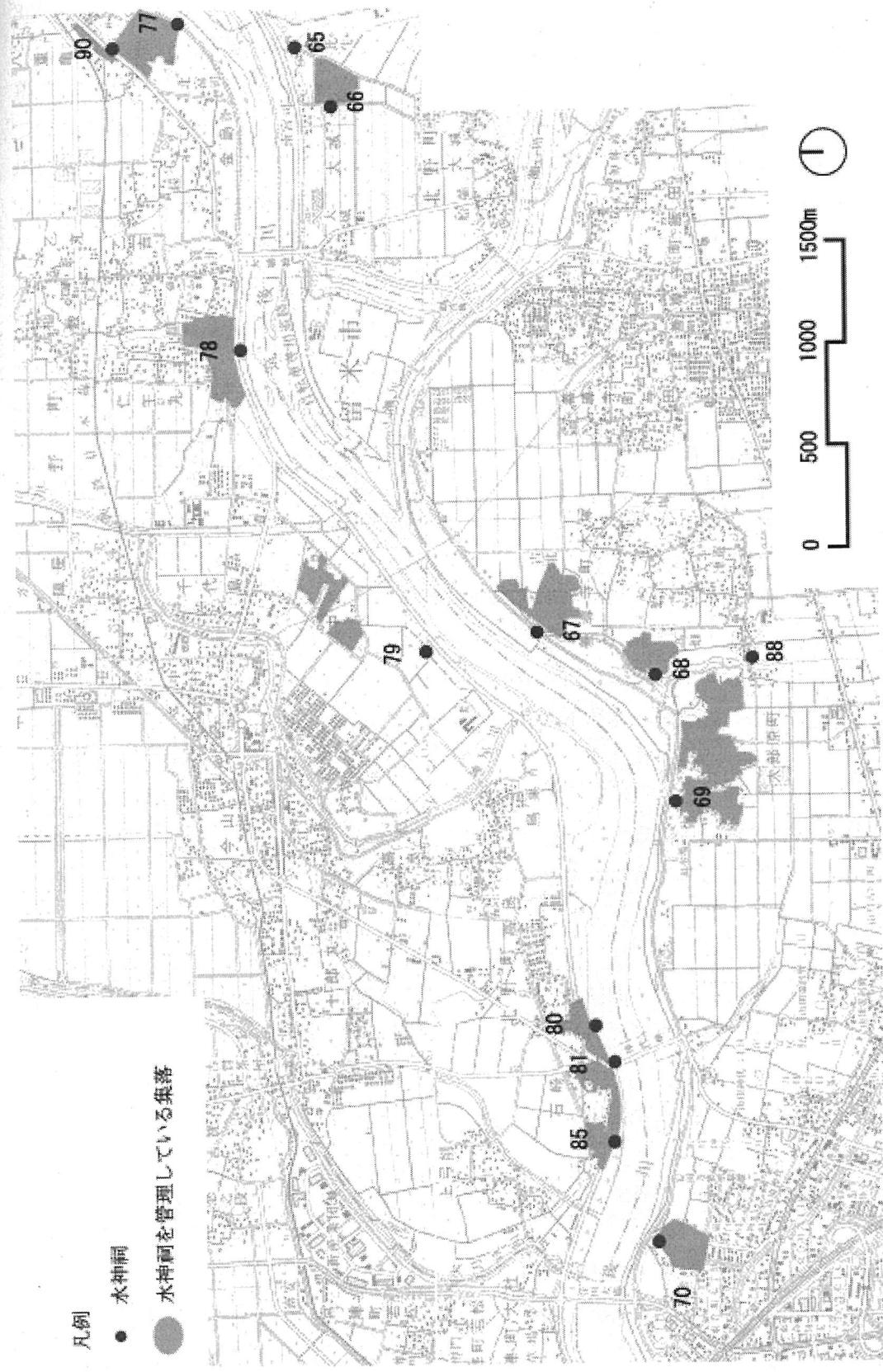


図3.2.1.5 集落との関係性

3.2.2 渡しとの関連

人々は生活上の必要性や神社仏閣への参詣などのため川を渡る必要があった。藩政時代、幕府は大河川に架橋することを認めなかつた。筑後川は肥前国、筑前国、筑後国の国境線であり、軍事的考慮によるものや、当時の土木技術の水準からの制約もあつたため、筑後川に橋は架けられなかつた。そのような筑後川に橋が架けられていなかつた時代から、渡しは生活上の重要な交通手段として重要な役目を果たしてきた¹⁾。筑後川には多くの渡しが行われており、渡し船が各地の風物詩となっていた。渡しの最盛期には筑後川に 62 箇所の渡し場が存在していた²⁾。しかし、昭和 30 年代から各地で橋が架けられ、渡しの数が急速に減少し、平成 6 年（1994）の下田の渡しを最後に、筑後川から渡しが姿を消した。渡し場があつた数箇所では、渡し跡として石碑が作られ、渡しの記憶が形として引き継がれている。人々が日常的に利用した渡しは人と川との関係性を示すと考えられる。

3.2.2.1 筑後川絵図の渡し

弘化 3 年（1846）の「筑後川絵図 甲・乙³⁾」に描かれた渡しをプロットした。図が参考にした「筑後川絵図 甲・乙」の一部抜粋である。この渡しの位置を明治 33 年の 5 万分の 1 の地形図にプロットした。この年の地形図を使用したのは、国土地理院が作成した旧版地図で最も古い地形図が明治 33 年に測量したものであったためである。これは第三期改修の改修前の河道であり、弘化三年の筑後川絵図の時代に最も近い河道として用いた。

図 3.2.2.1.1、図 3.2.2.1.2、図 3.2.2.1.3、図 3.2.2.1.4 が水神祠と渡し場の位置をプロットした図である。筑後川絵図から 22 箇所の渡しをプロットした。このプロットした渡しの両岸に水神祠が立地していないか確認した。すると、22 箇所のうち 11 箇所の渡しで水神祠が確認できた。そのうち両岸に水神祠があるのは 2 箇所、片岸のみに確認できた水神祠は 9 箇所だった。確認できた水神祠は以下の 13 箇所の水神祠である。以下に該当する水神祠を整理する。

【41】、【55】左岸側の水神祠の裏には「川船安全」の刻印が確認でき、現在も右岸に渡し場へのアプローチとなる石畳が確認でき、ヒアリングからも渡しがあったことが確認された。

【51】この水神祠を管理しているのは舟守という名の集落であり、名称からも舟との関連性が推測される。

【57】、【58】現在も右岸には渡し場へのアプローチとなる石畳が確認できる。

【61】【62】【64】

【67】水神祠の隣には「古北渡場跡」の石碑があることが確認される。この古北の船渡しは鯰久保新川ができることにより取り残された古北、木塚村の飛地の耕作のためにできたものであり、人々が田畠を耕作して生活していくために、この渡し場の役割が大きかつたため水神祠もこの地に祀られていることが推測される。

【77】ヒアリングより高島に渡し場があったことが確認された。

【78】現在も残る石積みの堤防を川の片に降りた先に渡し場があったということがヒアリングより確認された。

【81】

【87】渡しあったことがヒアリングより確認された。写真の道路は堤内地の道で、昔はこの道が渡し場と繋がっており賑わいがあったことが確認された。地図により、道路が渡し場まで伸びていることがわかり、水神祠もその道沿いに立地しており、舟渡しとの関連性があることが推測される。現在の道路の様子から当時の様子を見ることができない。現在の道路の様子からは見ることができない。

のことから、渡し場と水神祠の立地には関係性があることがわかる。また、両岸に水神祠が確認できる渡し場が 2 箇所あることより、渡しの両岸には元々水神祠が祀られていた可能性があることが考えられる。つまり、現在片岸でしか確認できなかった 9 箇所の渡し場にも、昔は両岸に水神祠があったということが推測される。

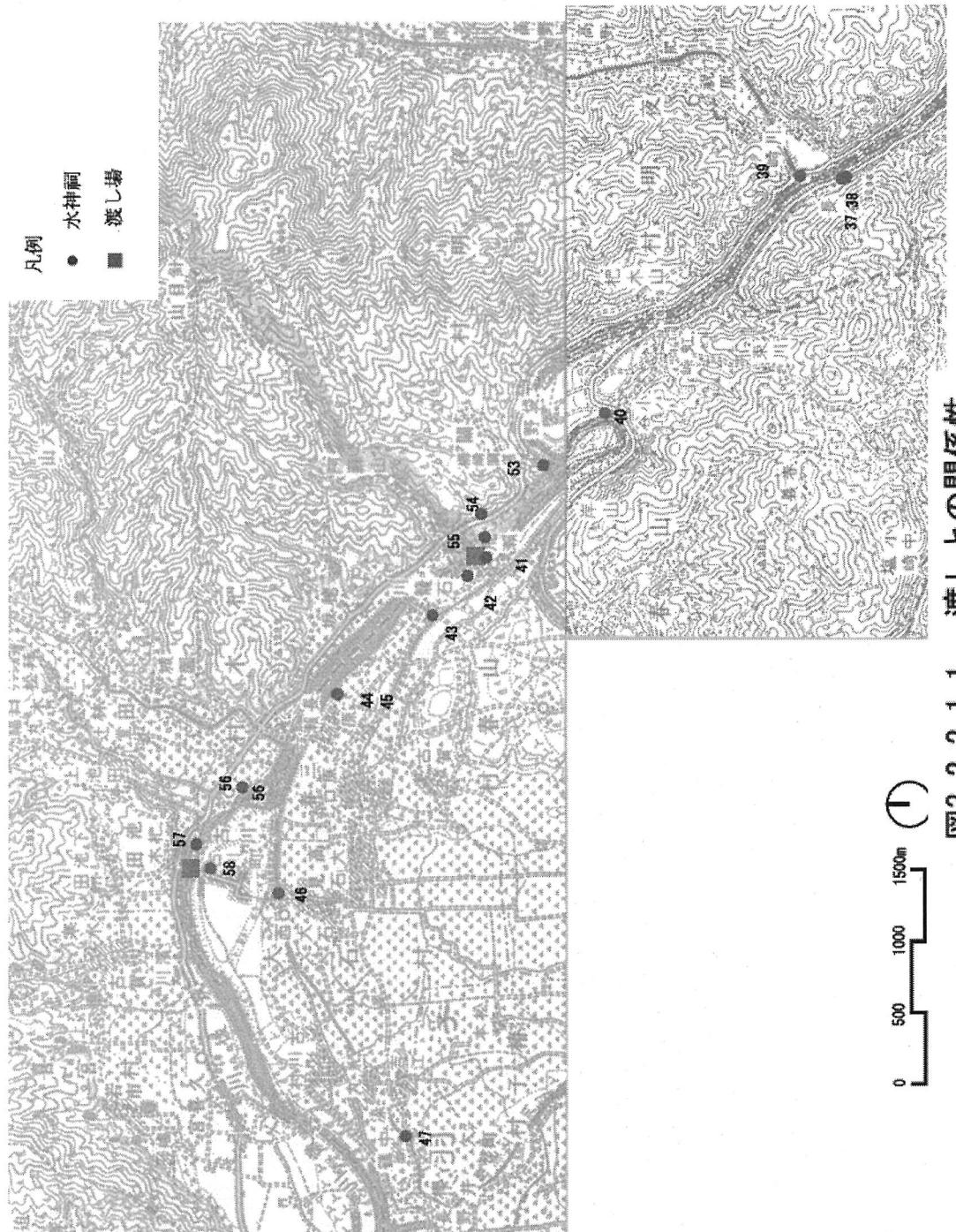


図3.2.2.1 渡しとの関係性

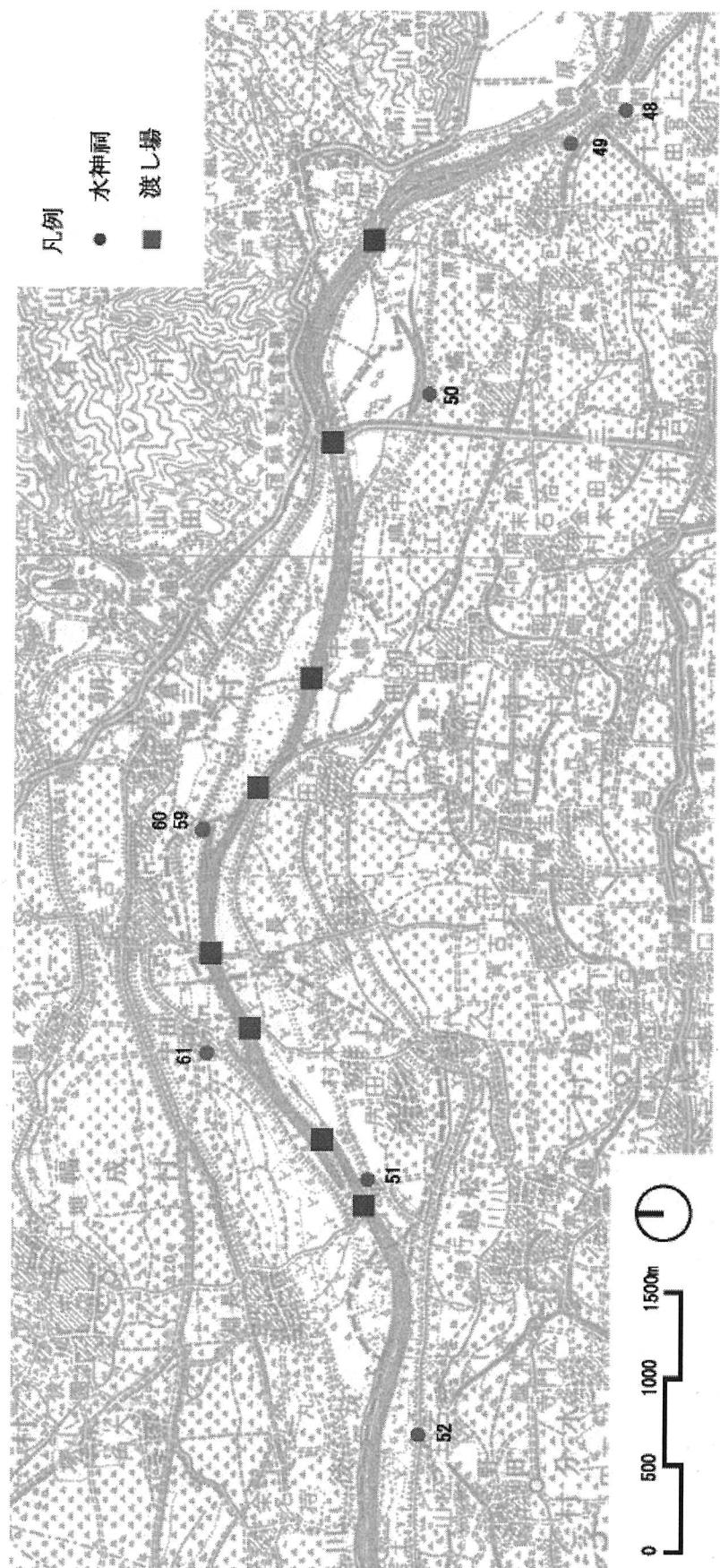


図3.2.2.1.2 渡しとの関係性

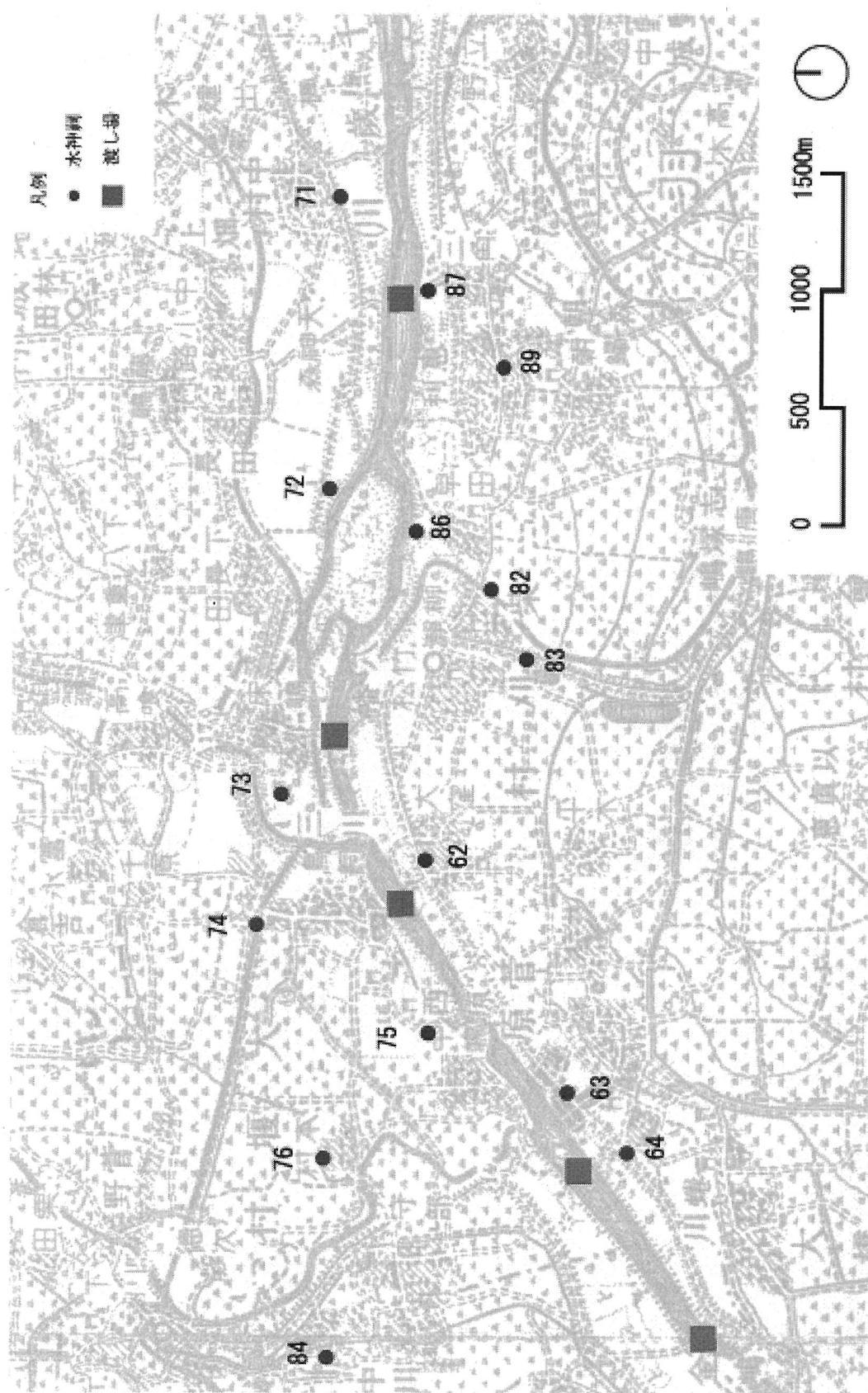


図3.2.2.1.3 渡しとの関係性

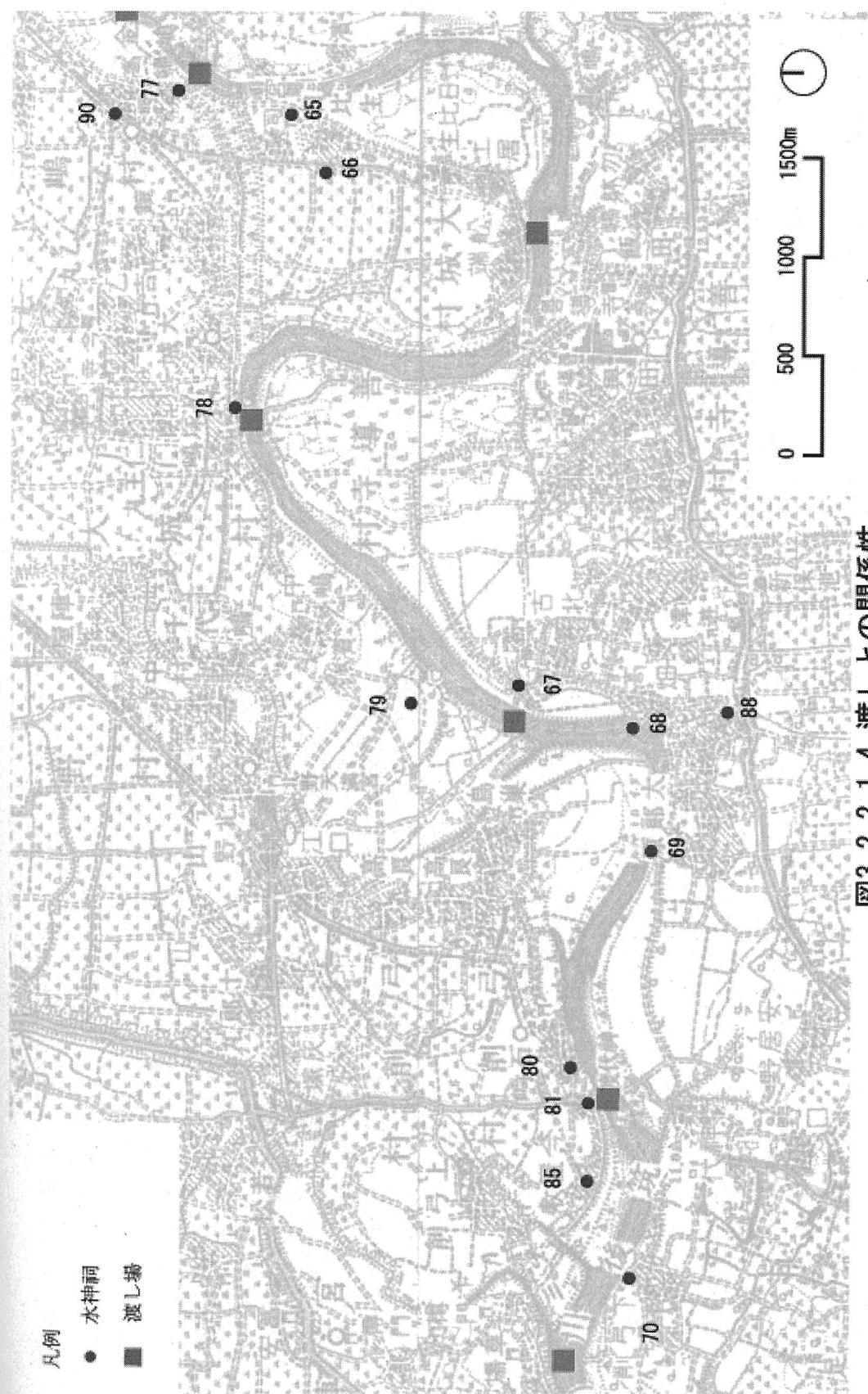


図3.2.2.1.4 渡しとの関係性

3.2.2.2 日田郡絵図の渡し

筑後川絵図には上流の日田付近が描かれていなかった。そこで、江戸期の「日田郡絵図（会所控）⁴⁾」を参考に、川を横断して道が描かれた場所を渡しとして明治 33 年の地形図にプロットした。この絵図より 9 箇所の渡し場をプロットした。そのうち 4 箇所に水神祠が見られた。図 3.2.2.2.1 が水神祠と渡し場の位置をプロットした図である。以下に該当する水神祠を整理する。

【3】【18】【23】【28】

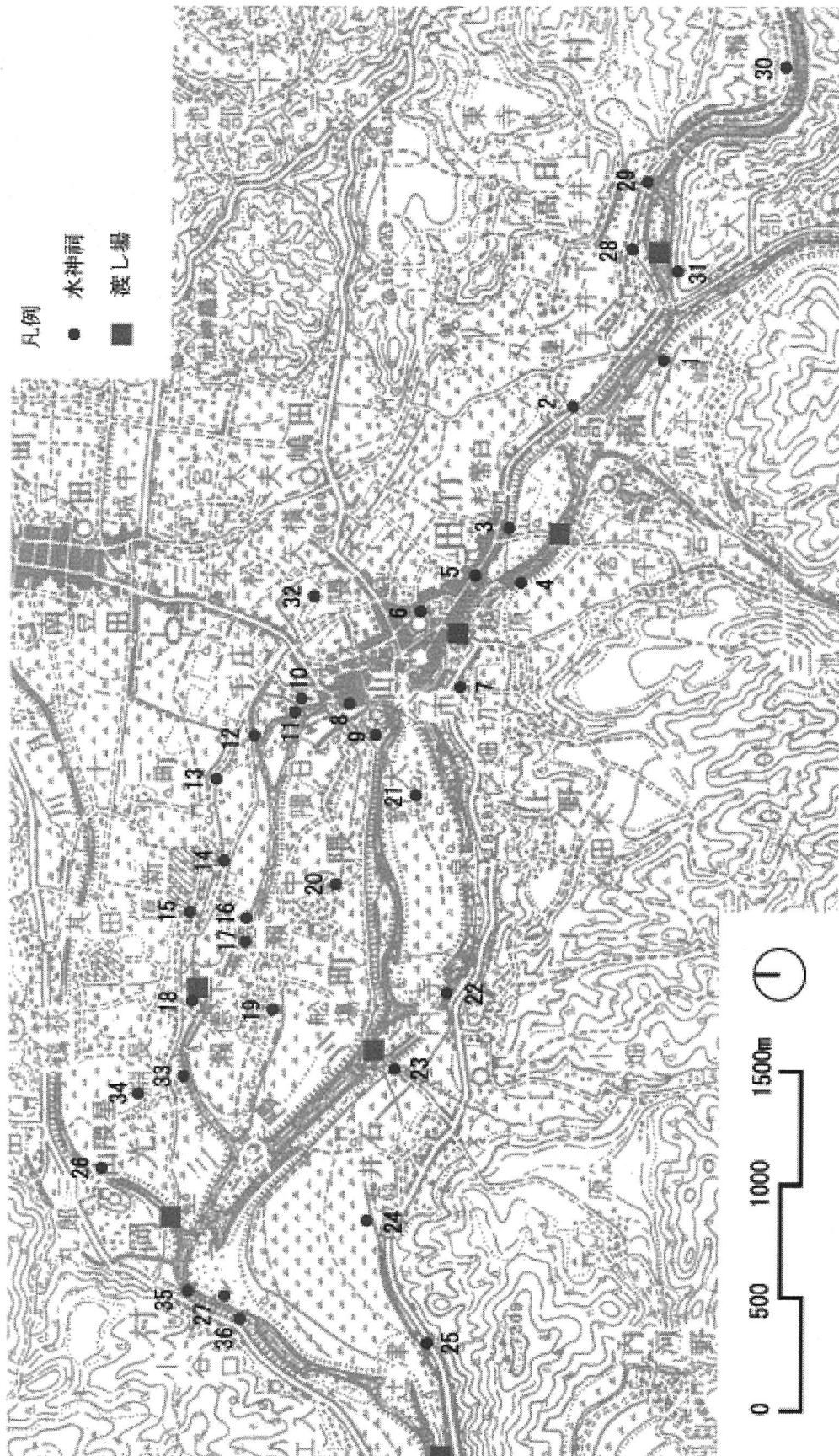


図3.2.2.1 渡しとの関係性

3.2.2.3 最盛期に存在する渡し

渡しの最盛期には筑後川で 62 箇所の渡し場あったことが確認できる。この 62 箇所は筑後川工事事務所に発行された「筑後川歴史散策 治水・利水編⁵⁾」を参考にし、範囲は三隈川と花月川の合流部付近から下流の渡しである。これに記載されている渡しの名称と地名を確認しながら、明治 33 年の地形図に渡しがあったとみられる箇所にプロットした。今回の研究範囲にある渡しは 29 箇所である。図 3.2.2.3.1、図 3.2.2.3.2、図 3.2.2.3.3、図 3.2.2.3.4、図 3.2.2.3.5 が水神祠と渡し場の位置関係を示した図である。

絵図の分布と比べてみると、絵図から最盛期までの時間の変化において、絵図の時代より後にできたと考えられる渡しには水神祠が周辺に確認できなかった。このことから、弘化三年（1846）より後に作られた渡しの中で、渡しが新しくできたことが理由として建立された水神祠は確認できなかったといえる。

絵図に描かれていなかった範囲で、最盛期の渡し箇所として確認できた渡し場は 5 箇所である。この箇所で水神祠が確認できた渡しは 2 箇所である。

【23】 この辺りに住む漁師の人々がこの水神祠を参っていたことが確認された。

【37】、【38】

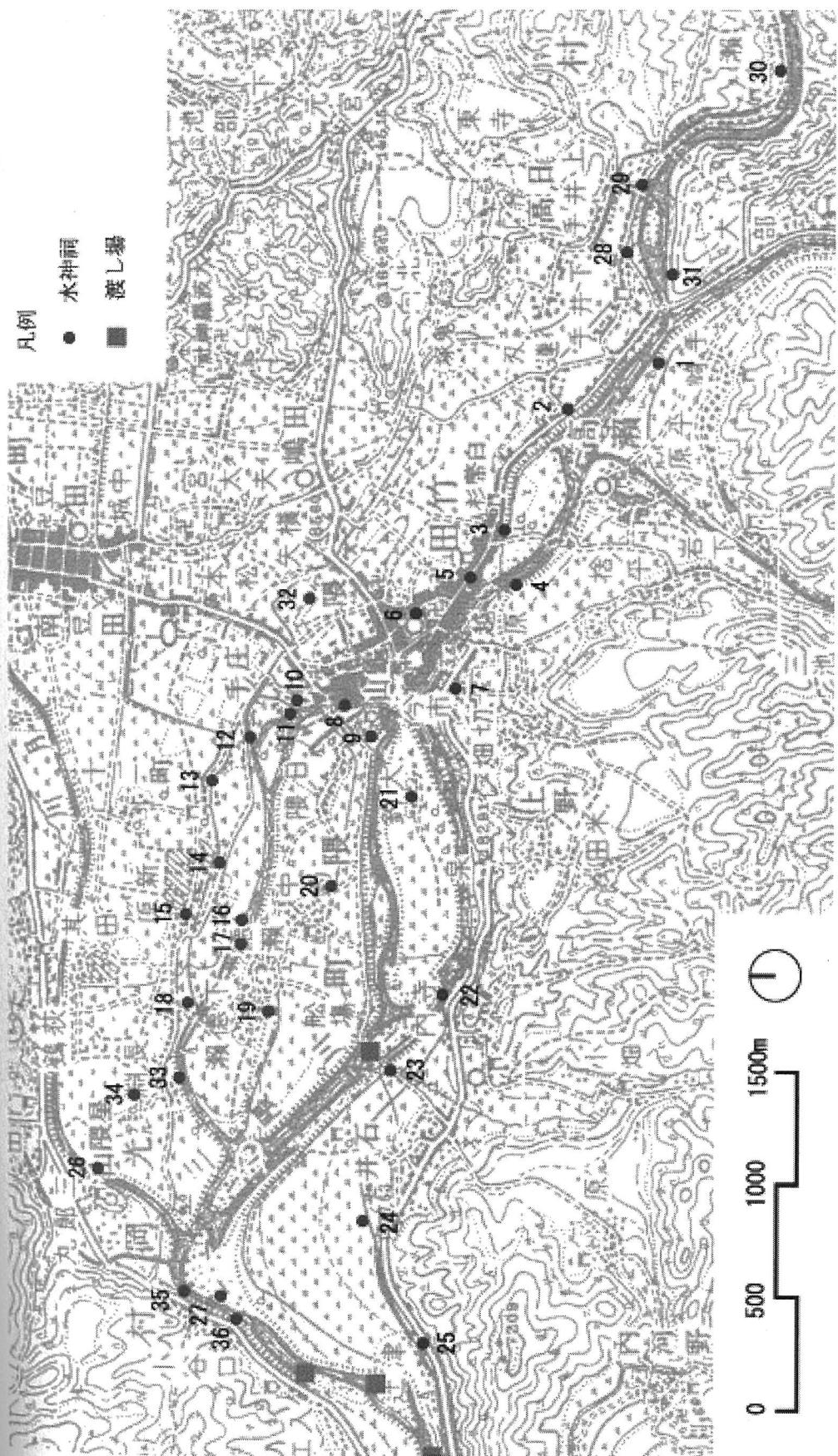


図3.2.2.3.1 渡しとの関係性

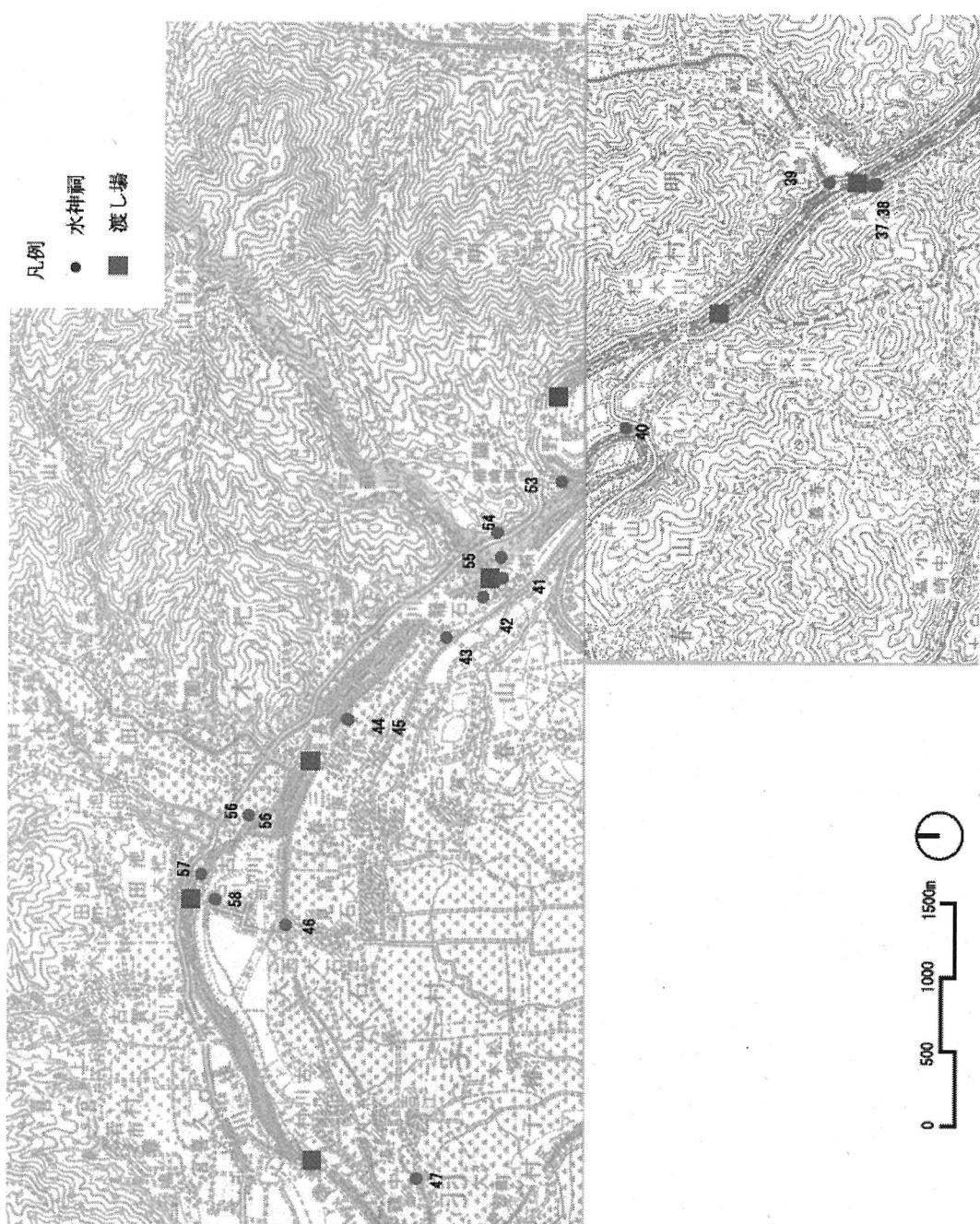


図3.2.2.3.2 渡しとの関係性

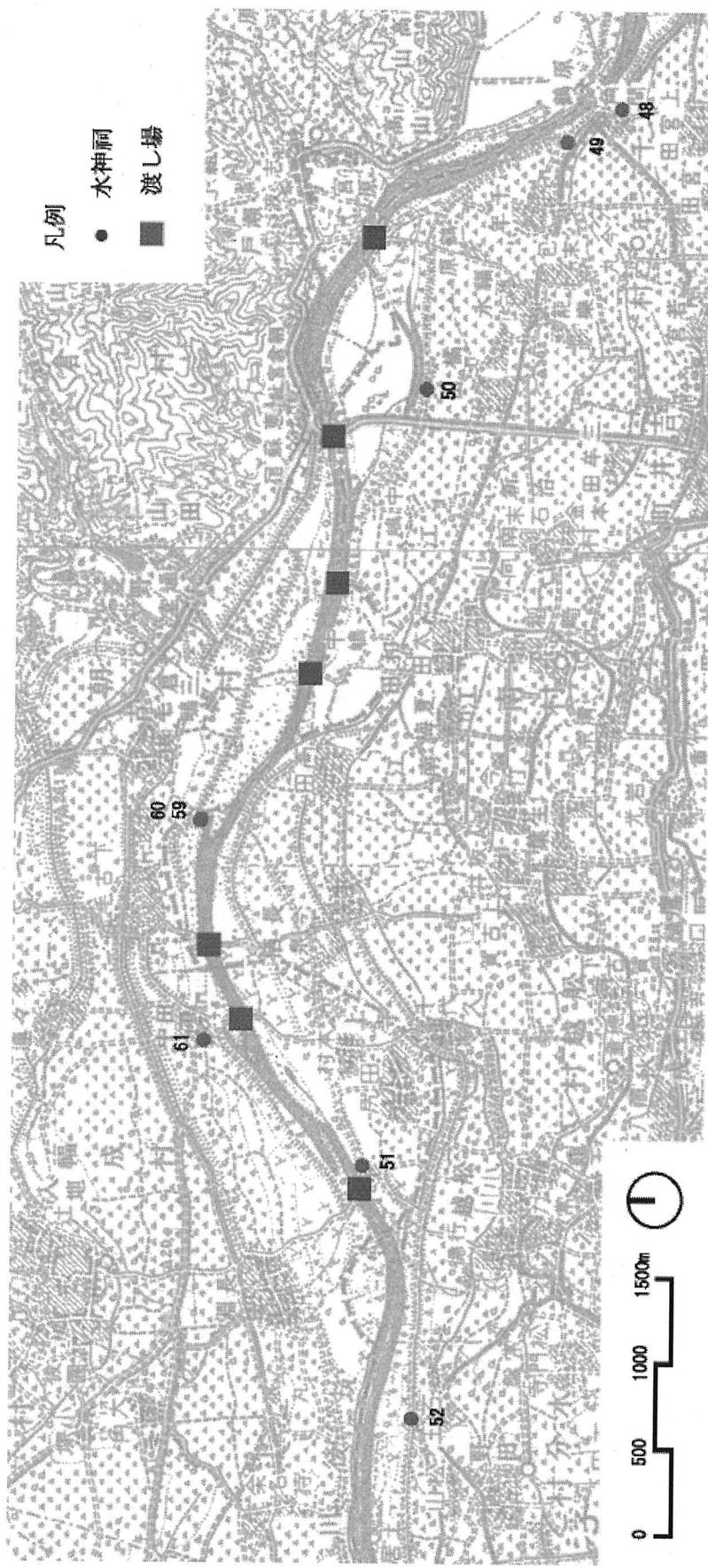


図3.2.2.3.3 渡しとの関係性

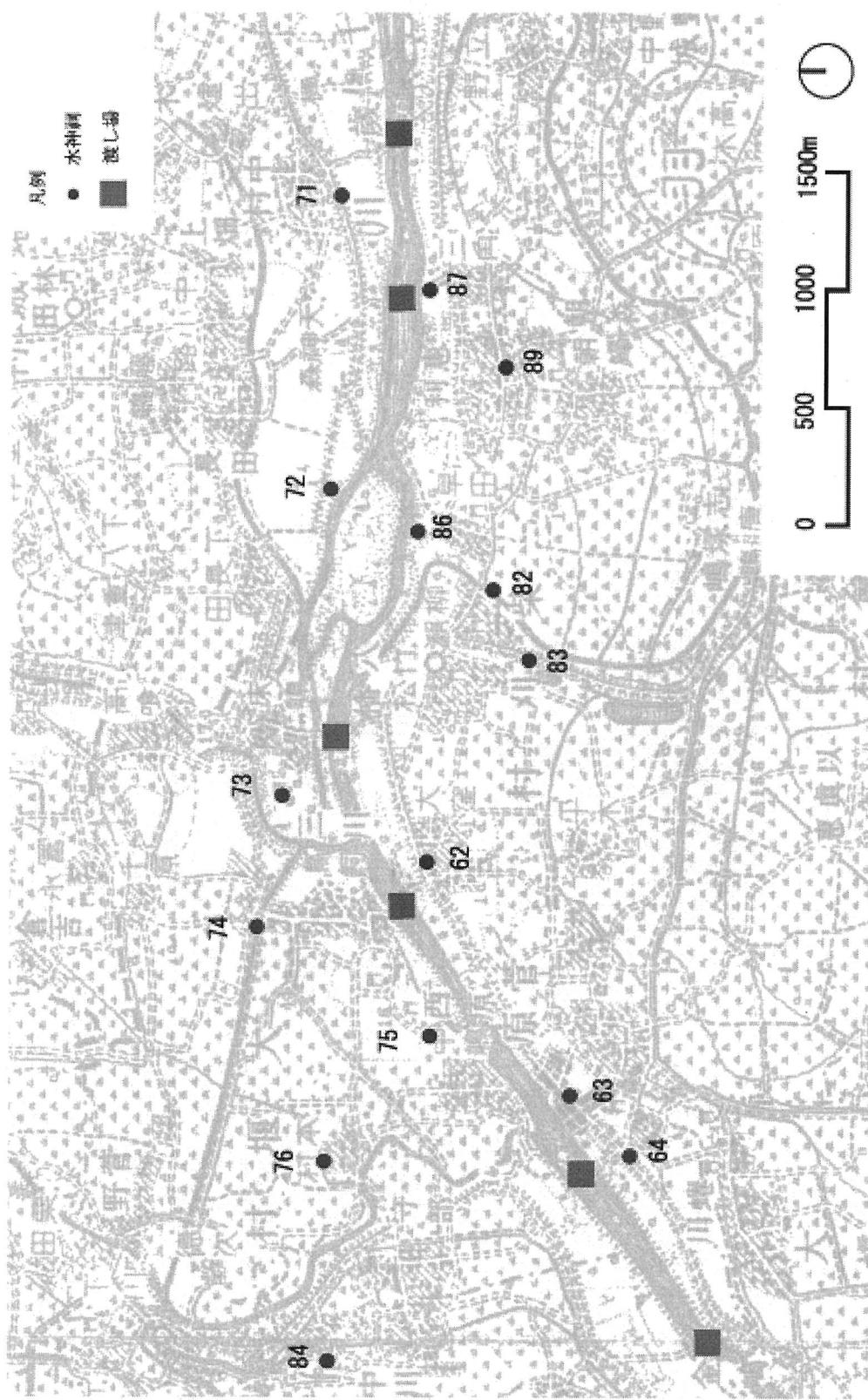


図3.2.3.4 渡しつとの関係性

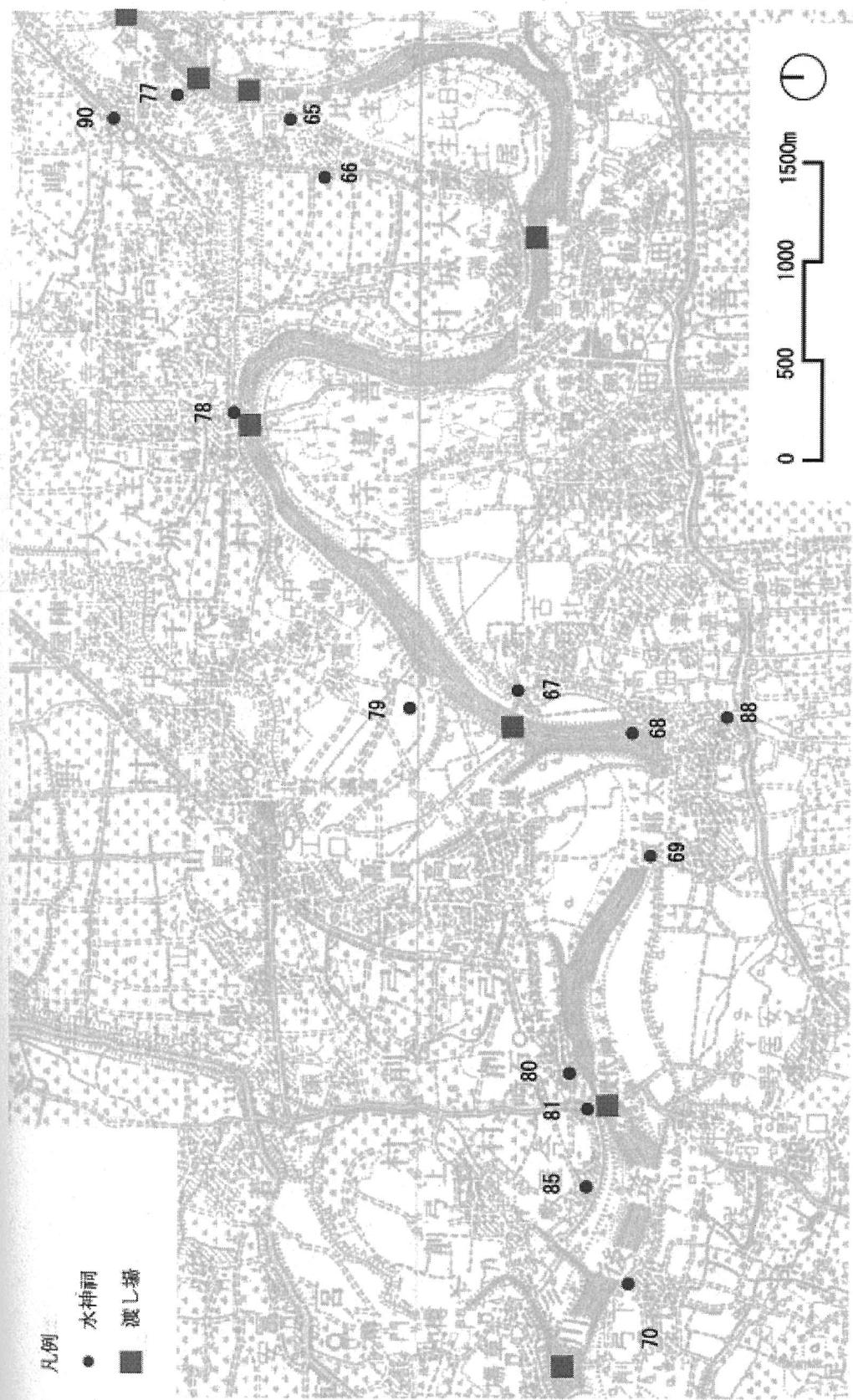


図3.2.2.3.5 渡しとの関係性

3.2.2.4 渡しと河道変遷との関係性

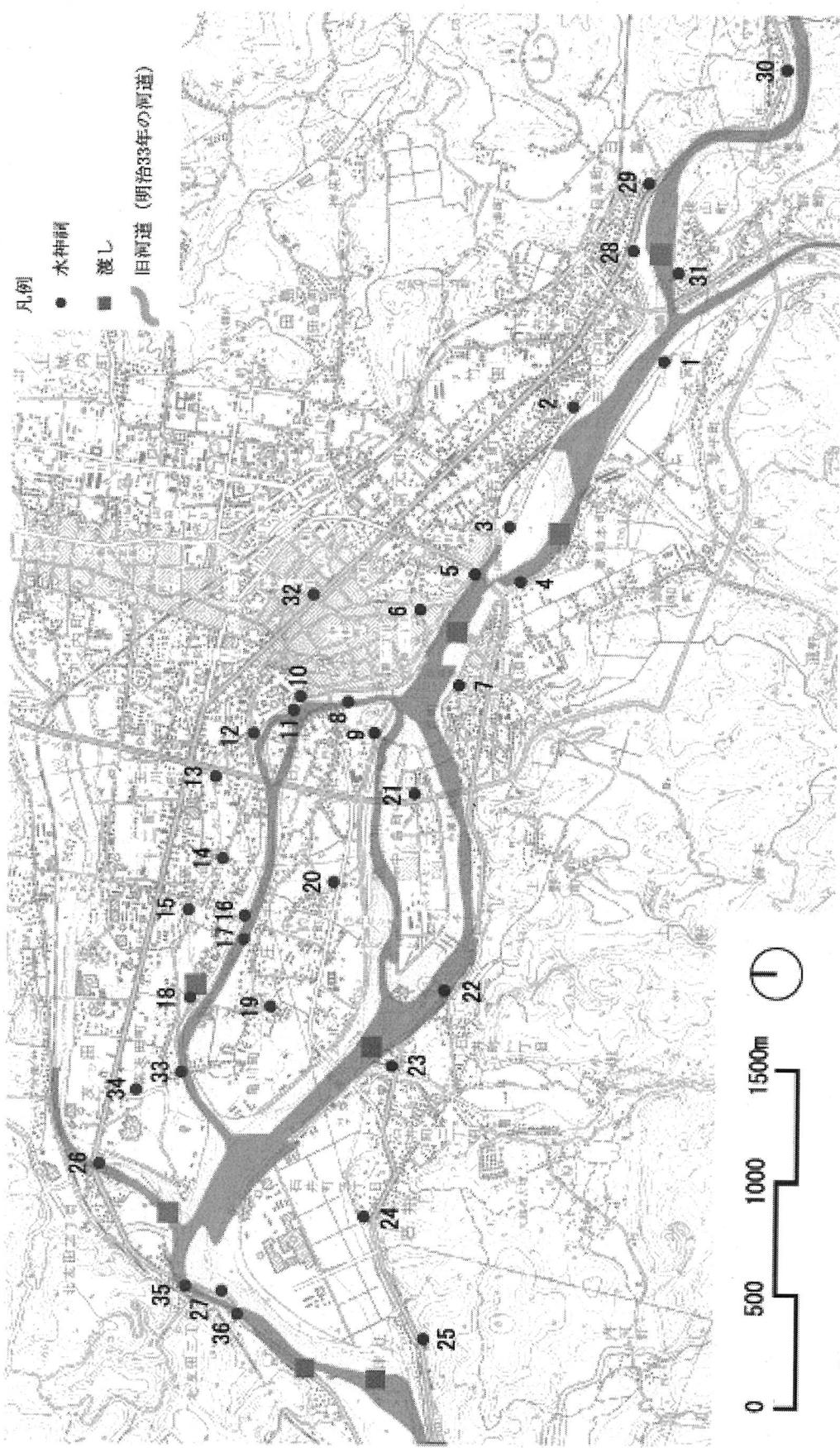
両岸に水神碑が立地した渡し場があったことより、渡し場には元々両岸に水神祠が祀られていたという可能性が考えられる。これまで行われてきた河川改修の際に水神祠が移設された可能性が考えられる。そこで片側に水神祠の渡し場に着目し、その対岸の河道変化を確認した。明治33年の河道を現在の河道と重ね、河道の変化の大きさを確かめてみた。図3.2.2.4.1、図3.2.2.4.2、図3.2.2.4.3、図3.2.2.4.4、図3.2.2.4.5が水神祠、渡し場、旧河道の位置関係を示した図である。

対岸にのみ水神祠が確認できたのは以下のものである。

【23】【37】【38】【51】【61】【62】【64】【77】【78】【87】

水神祠のある岸の対岸をみると、8箇所の渡し場で河道の拡幅、変化が確認できた。このことから、河道拡幅の工事の際に水神祠を移動した可能性が考えられる。集落が確認できる場所は、水神祠が集落の中に移設された可能性が考えられる。集落が確認できない場所は、河道拡幅の工事の際に集落が移動し、その際に水神も集落と一緒に移動した可能性が推測されるため、今は確認できない水神祠の存在を明らかにするためには今後追加調査が必要である。

図3.2.4.1 渡しとの関係性



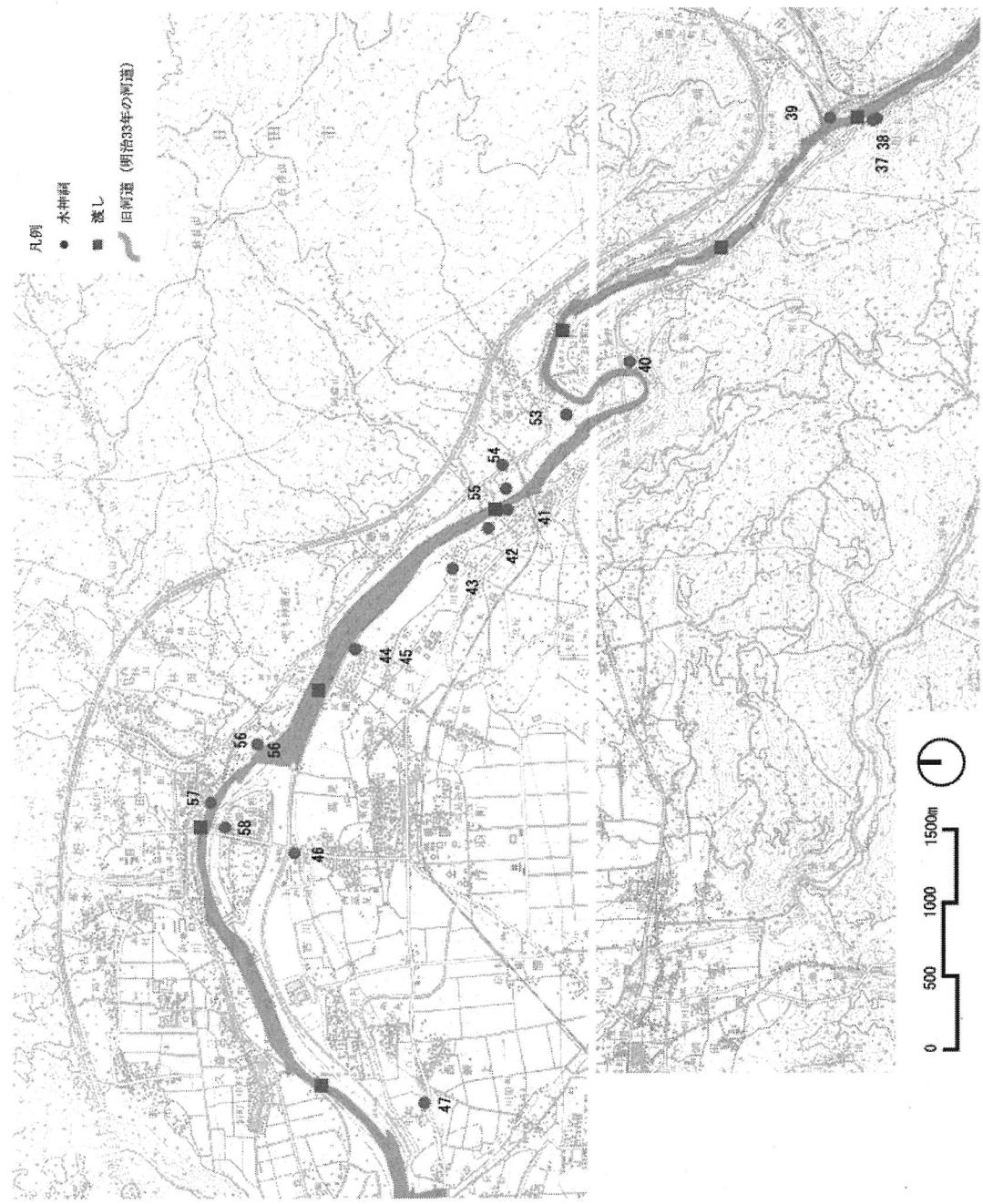


図3.2.2.4.2 渡しとの関係性

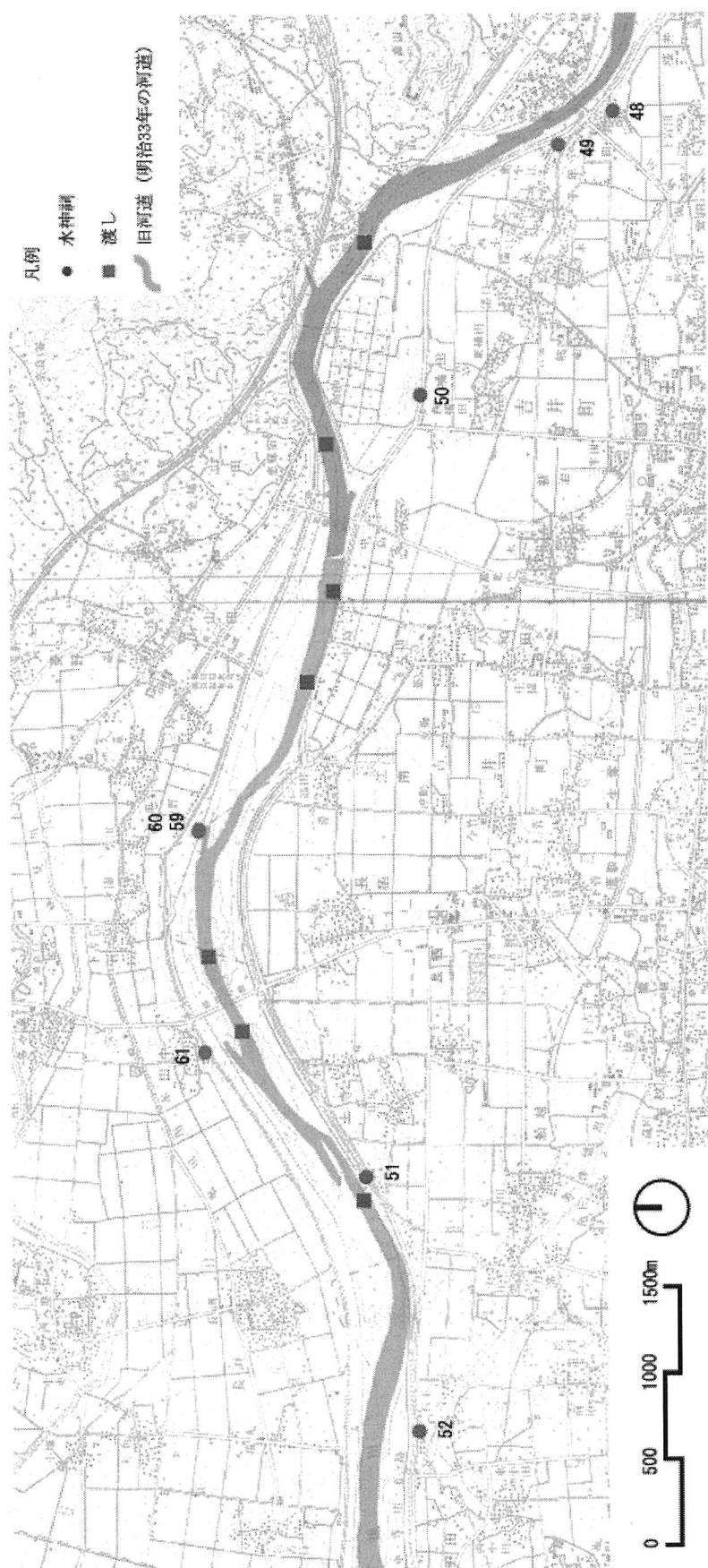


図3.2.2.4.3 渡しとの関係性

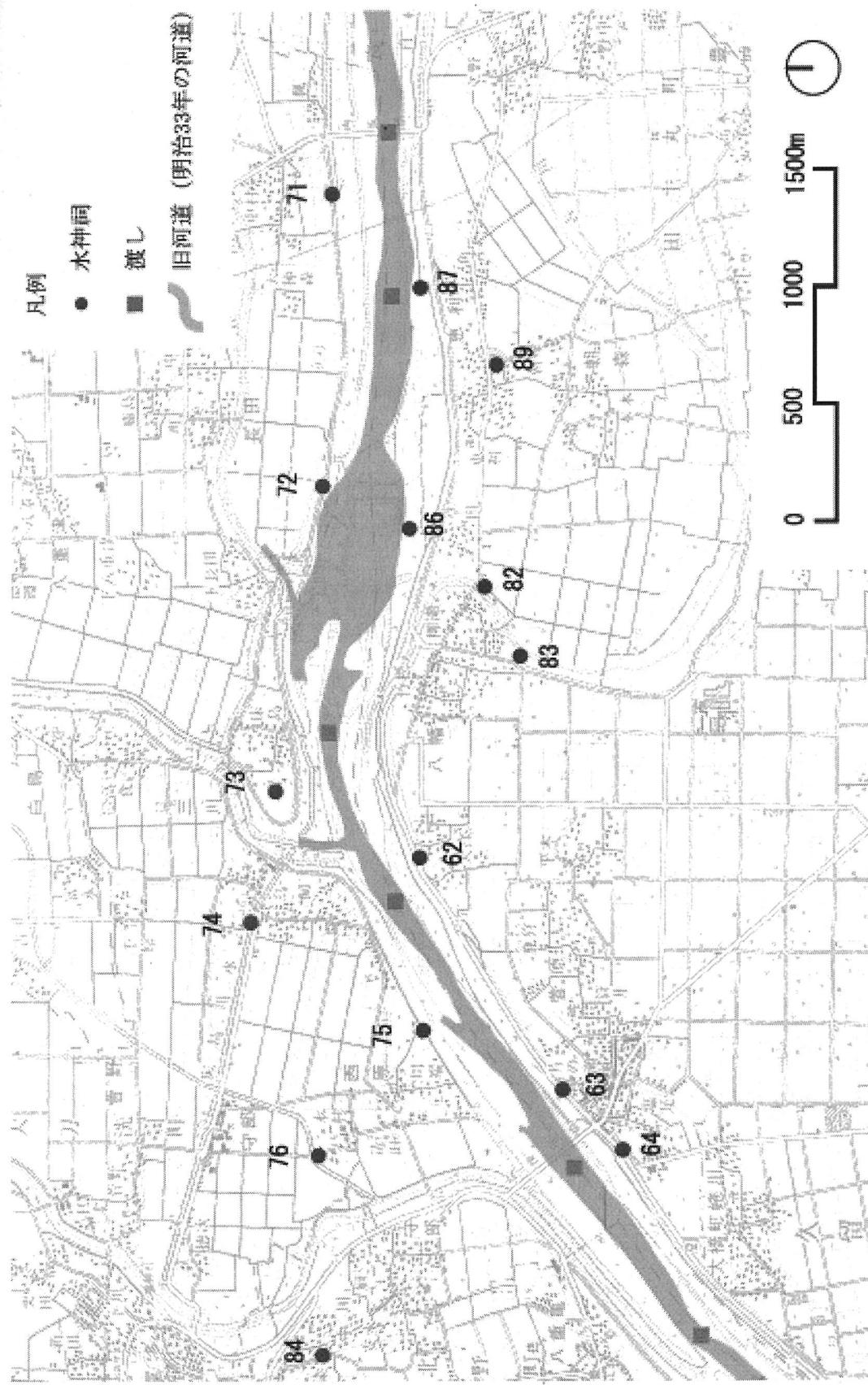


図3.2.2.4.4 渡しとの関係性

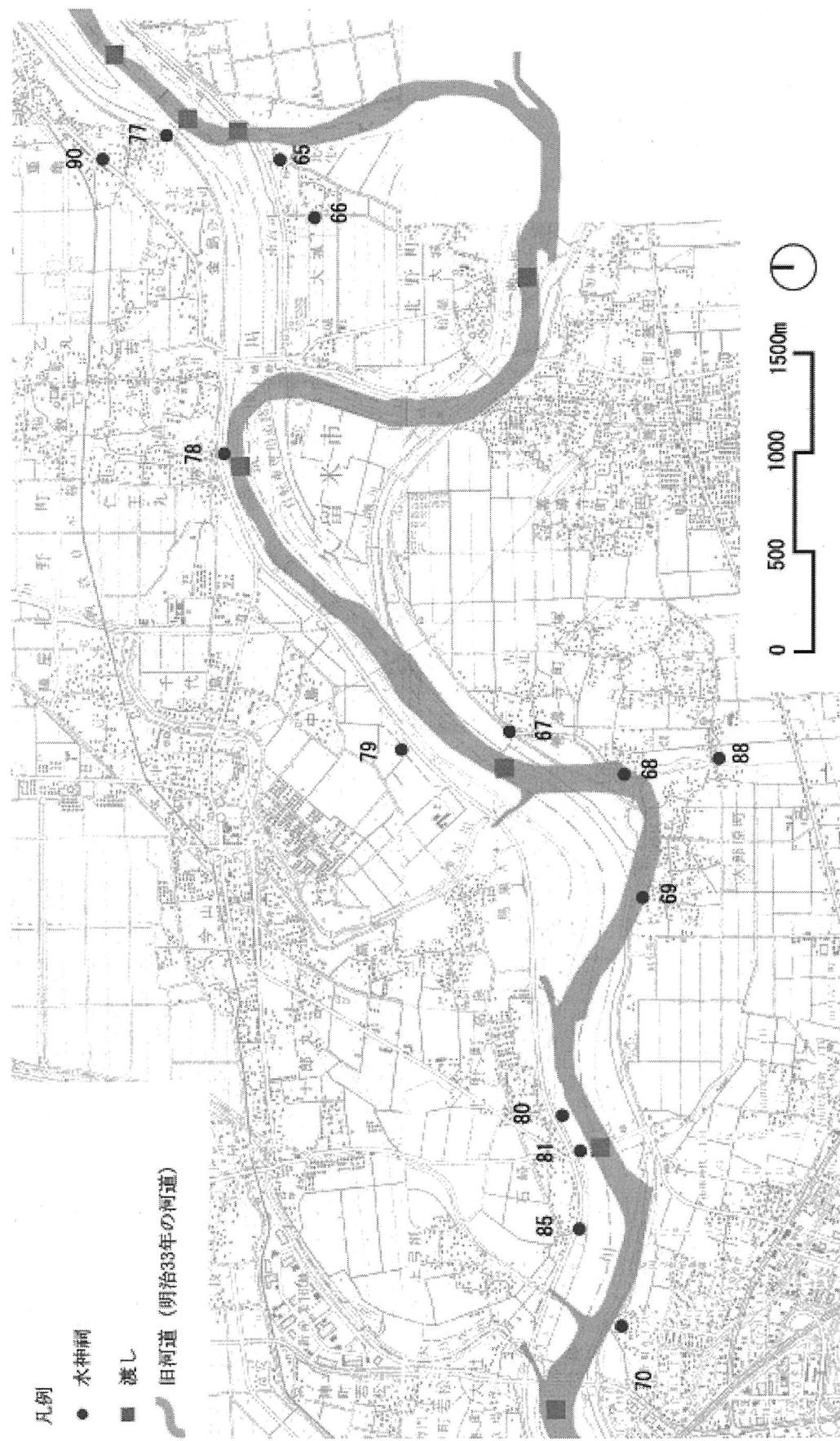


図3.2.2.4.5 渡しとの関係性

3.2.3 川港、筏場、筏宿との関連

筑後川における舟運は、鉄道・自動車などの近代的な交通手段によって交通網が整備されるまで。筑後川の舟運は欠くことができないものであった。下流部の港では、風と潮を巧みに利用して帆掛け舟が出入して物資の集散に当たり、上流日田からは筏を組んだ木材が久留米・若津に運ばれた。これが行きかう有様は筑後川を彩る豊かな風情であった⁵⁾。

特に、久留米藩は、地理的条件に恵まれ、福岡、佐賀の両藩に比べて利用度が高く正保3年（1646）年貢米輸送のため、瀬の下に人や荷物を積み卸しする場所として川岸を藩主が開設したことにより、久留米藩の表玄関として繁盛を極めた。瀬の下は筑後川水運の拠点をなすもので、「諸邦の商戦、米府に来る会津なり」と筑後史誌で伝えられるように、筑後川の要港で上下流の積み替え点にもあたり水運の関所となつた。近世の久留米藩の年貢米は筑後川を利用して藩の3箇所の倉庫、城内の永倉、瀬の下の浜倉、若津の若津倉に納入された。17世紀後半になると、荒瀬、恵利、片ノ瀬、住吉に川岸が置かれ、筑後川の舟運の拠点とされた⁶⁾。

また、近世以降になると材木業が日田の主幹産業となり、江戸期から始まった材木の筏流しが目立つようになった。小国、玖珠から伐り出された日田杉は、大山川、玖珠川を下り、本川に辿り着くと銭淵橋付近に貯木され、河畔の製材所で積み卸しが行われた。また、かつては亀山橋付近にも貯木場があった。この木材を筏に組んで筑後川で流し、大川まで下っていた。

研究対象の範囲で、荒瀬、恵利、片ノ瀬の3箇所が川港として設置されたことが確認できる。川港は渡しと一致すると考えられるので、地名にある私を川港としてプロットした。

筏場は資料より筏場として確認できた銭淵橋付近と亀山公園付近の2箇所にプロットした。

筏宿は「筑後川を道として 日田の木流し、筏流し」を参考に、恵蘇宿、床島、恵利、鳥飼、片ノ瀬、善導寺の6箇所⁷⁾をプロットした。筏宿の正確な場所は確認できず、地名の場所に筏宿をプロットしたため必ずしも正確な位置とはいえない。図3.2.3.1、図3.2.3.2、図3.2.3.3に水神祠と川港、筏場、筏宿の位置関係を示した。

プロットしたうち、周辺に水神祠が確認できた要素は、川港が3箇所、筏場が2箇所、筏宿が3箇所であった。以下に該当する水神祠を整理する。

川港

【41】【55】舟渡し場の跡が現在にも見られ、この地に閑浜蔵所があつたことが現地の看板からもわかる。江戸時代の享保末年（1735）代官岡田庄大夫のころから、天領日田、玖珠の租米のうち一万八千石はこの閑浜に集められ、川船に積んで長崎へ送られるようになり、そのための蔵所がここに設けられていた。船の出入りなどで賑わっていたことがヒアリングからも確認できた。この辺りは繁華街になっていたそうである。現在ではその当時の様子を感じることができない。

【63】【64】【89】

筏宿

【63】【64】【73】【89】

筏場

【5】【8】

このことから筑後川で利用された舟運の拠点となる場所に水神祠が立地していることが確認でき、舟運の拠点地と水神祠の立地には関係性があることがわかる。

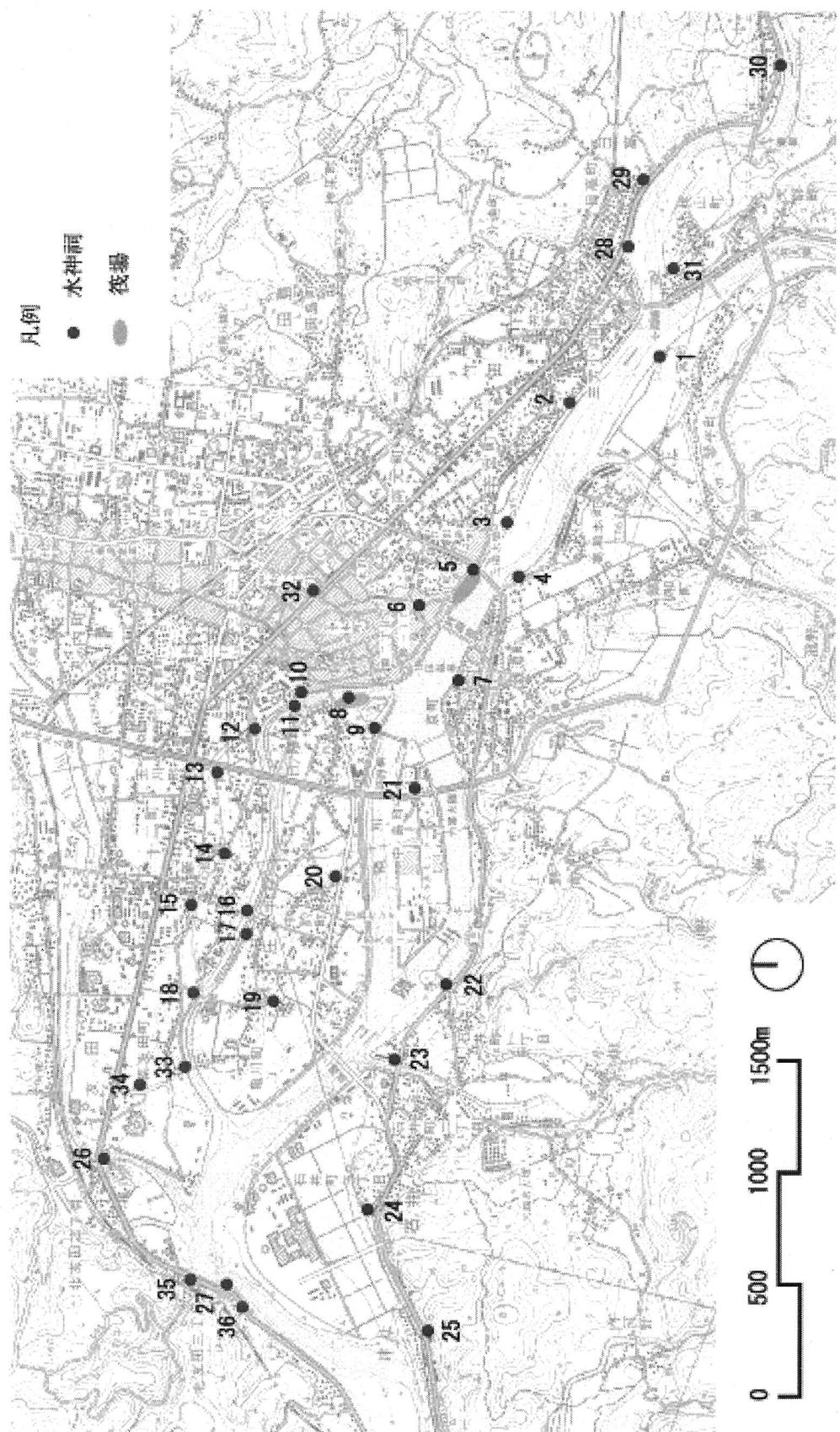


図3.2.3.1 川港、筏場、筏宿との関係性

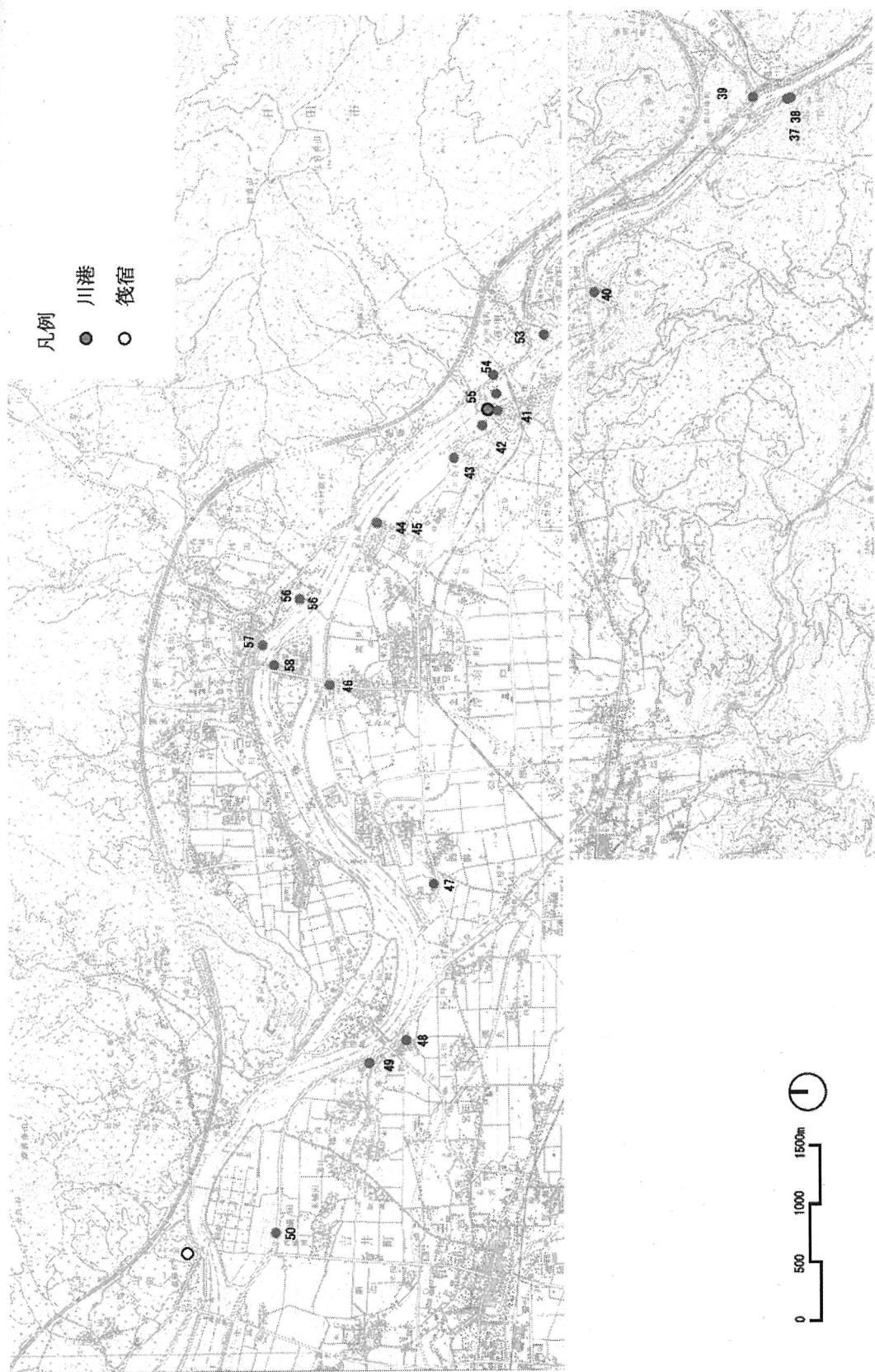


図3.2.3.2 川港、筏場、筏宿との関係性

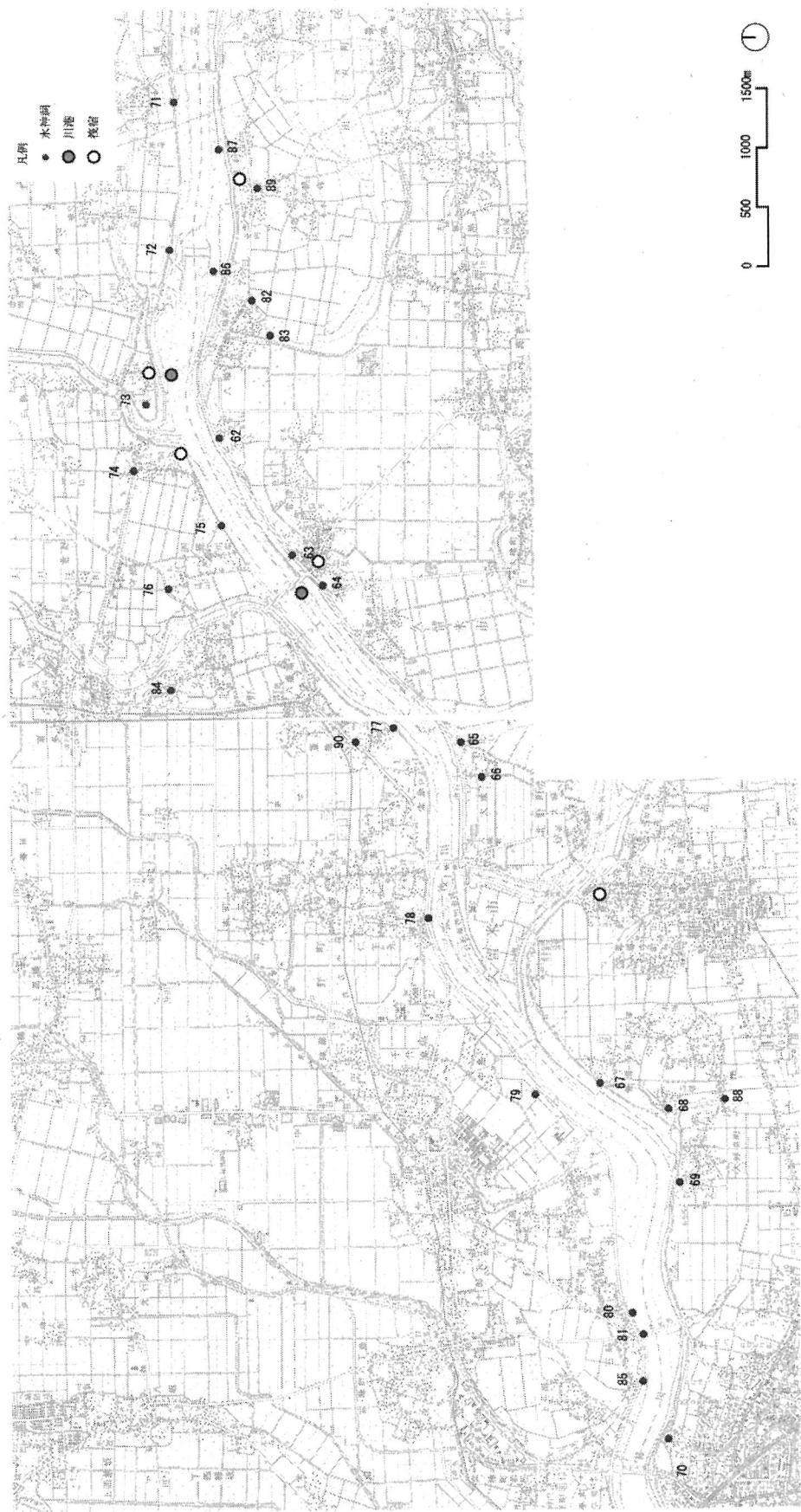


図3.2.3.3 川港、筏場、筏宿との関係性

3.2.4 瀬、淵との関連

瀬とは河川の中で流れが速く水深が浅い場所で、淵とは流れが緩やかで水深が深い場所のことをいう。瀬、淵は航海で事故に合いやすい場所、子供が川で溺れやすい場所として川の中で水難事故が起きやすい場所とされている。弘化三年（1846）の筑後川絵図にも瀬と淵の位置が描かれており、人々も川の中で注意を払っていた場所であることがわかる。また、日田にある「錢淵」には、水神祠の他にも、河童に関する伝承があることや、豪潮さんの大梵字岩が水難除けとされていることからこの淵の付近では水難事故が起きやすかった場所だったからこそ、水に関わる伝承が多く残っていると考えられる人々の生活が川と関わりをもっていたとすると、水難事故が起きそうな瀬、淵がある場所が理由で水神祠を祀っていたとして、瀬、淵は人々の暮らしと川との関係性を示す要素になると考えられる。

弘化3年（1846）の筑後川絵図の描かれた瀬、淵、大岩を対象とした。絵図に描かれるような大岩は瀬として航海の際に事故に合いやすかったことが考えられるためプロットした。この瀬、淵、大岩位の置を明治33年の5万分の1の地形図にプロットした。これは前に述べたように、弘化三年の筑後川絵図の時代に最も近い河道とし用いたためである。

絵図より瀬は17箇所、淵は2箇所、大岩は11箇所プロットした。図3.2.4.1、図3.2.4.2、図3.2.4.3に水神祠と瀬、淵の位置関係を示した。そのうち、水神祠が周辺に確認できたのは、瀬は5箇所、淵は1箇所、大岩は4箇所であった。

瀬

【42】荒瀬という地名にある水神祠で、瀬が水神祠の建立に関係性があることが推測される。

【49】絵図に描かれた「小江瀬」という瀬の側に位置する水神祠で、水神祠も小江の集落で管理していることから、瀬が水神祠の建立に関係性があることが推測される。

【53】有王社に祀られている。

【59】【60】

【72】恵理堰の側に位置する。

淵

【53】有王社に祀られている。

大岩

【40】有王の周辺に位置している。

【42】荒瀬という地名にある水神祠で、瀬が水神祠の建立に関係性があることが推測される。

【44】【45】東長瀬という地名にある水神祠で、瀬が水神祠の建立に関係性があることが推測される。また、この水神祠には水天宮にまつわる伝承が伝えられている。

【53】有王社に祀られている。

【40】、【53】の水神祠は有王淵と呼ばれる河道が急な S 字カーブのように曲がっている箇所で筏下りの難所とされた場所である。航海の難所ということが関係して水神祠が祀られた可能性が考えられる。

絵図に描かれない上流側については、地名を参考にした。日田の川沿いには「瀬」、「淵」が付けられている地名が多くあり、川の特徴から名付けられたと考えられる。そこで「瀬」、「淵」が付く地名がある場所の周辺に瀬、淵をプロットした。また、「明治八年隈町絵図」に描かれている三隈川と庄手川の合流部に描かれる瀬をプロットした。これも昔の川の様子のため、明治 33 年の 5 万分の 1 の地形図にプロットした。図 3.2.4.4 に水神祠と瀬、淵の位置関係を示した。

地名からは小ヶ瀬、高瀬、銭淵、徳瀬、下徳瀬、長淵を参考にプロットした。瀬は 4 箇所、淵は 3 箇所プロットした。図 3.2.4.2 に図を示す。水神祠が周辺に確認できたのは、瀬が 3 箇所、淵が 3 箇所であった。

日田

瀬

【16】【17】徳瀬に立地する。

【18】下徳瀬に立地する。

【30】小ヶ瀬に立地する。

淵

【2】小淵に立地する。

【4】銭淵に立地する。

【33】長淵に立地する。

川に瀬と淵がある場所や、瀬、淵が入っている地名に立地する水神祠は、瀬、淵が立地要因である可能性が考えられる。

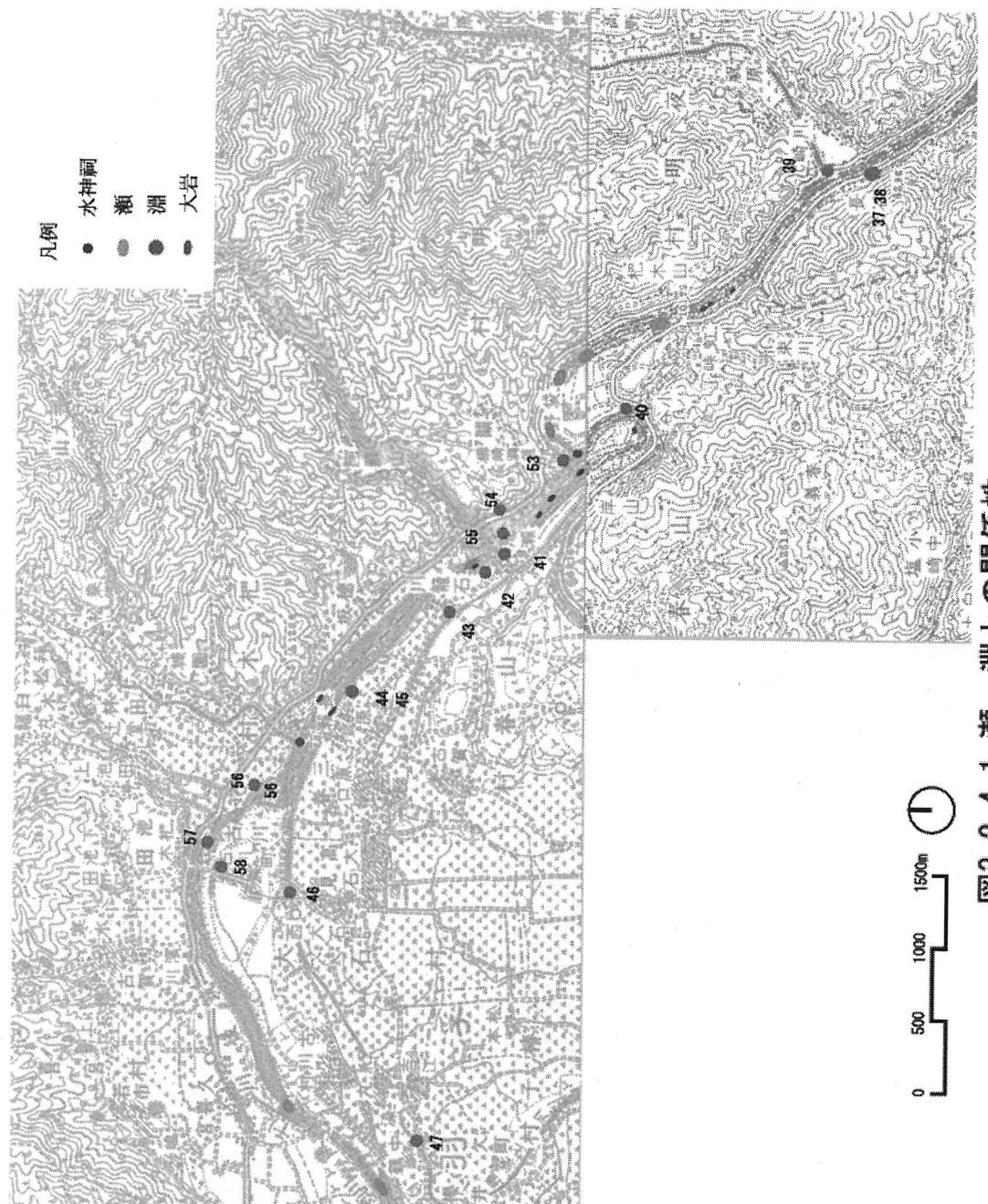


図3.2.4.1 潺、澗との関係性

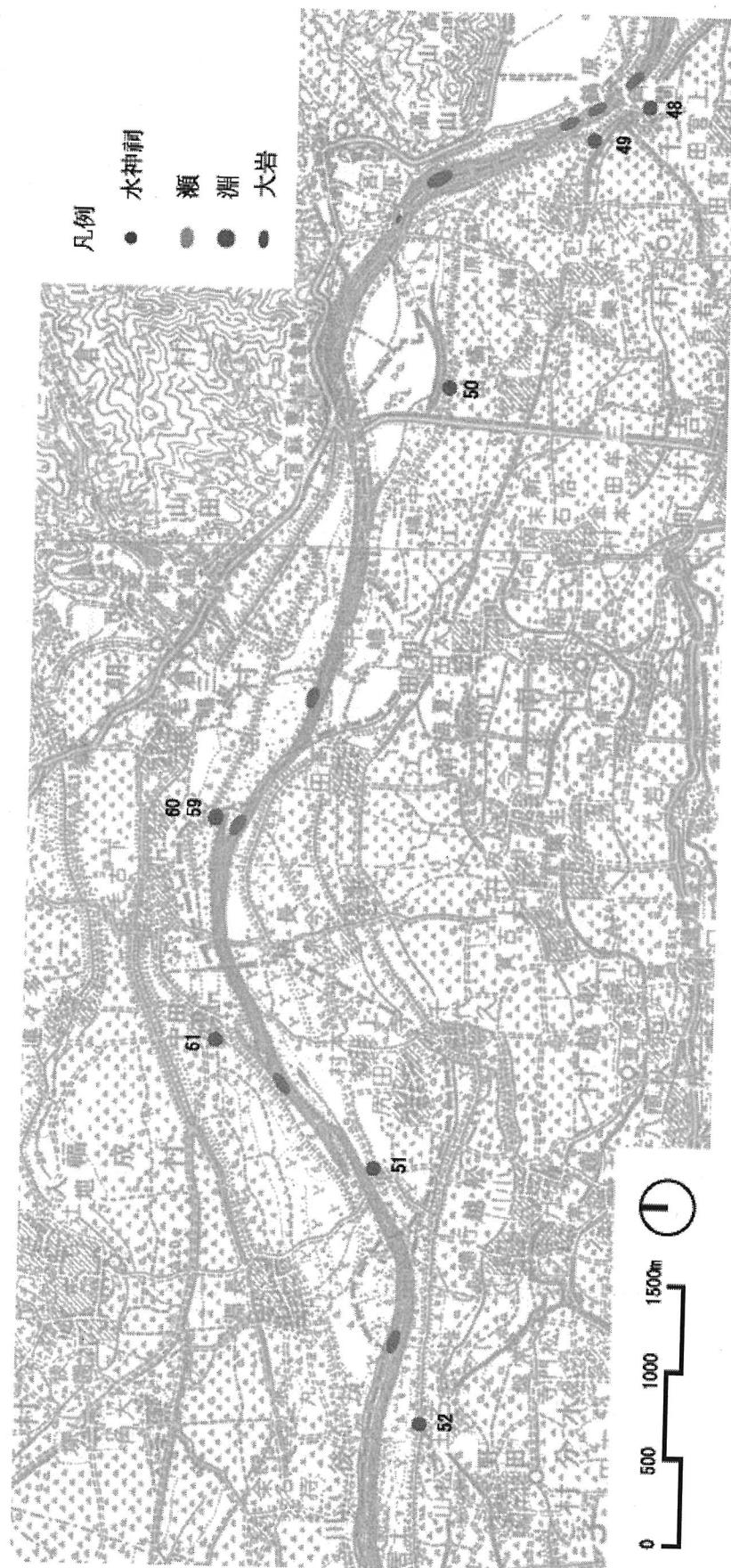


図3.2.4.4 澪、淵との関係性

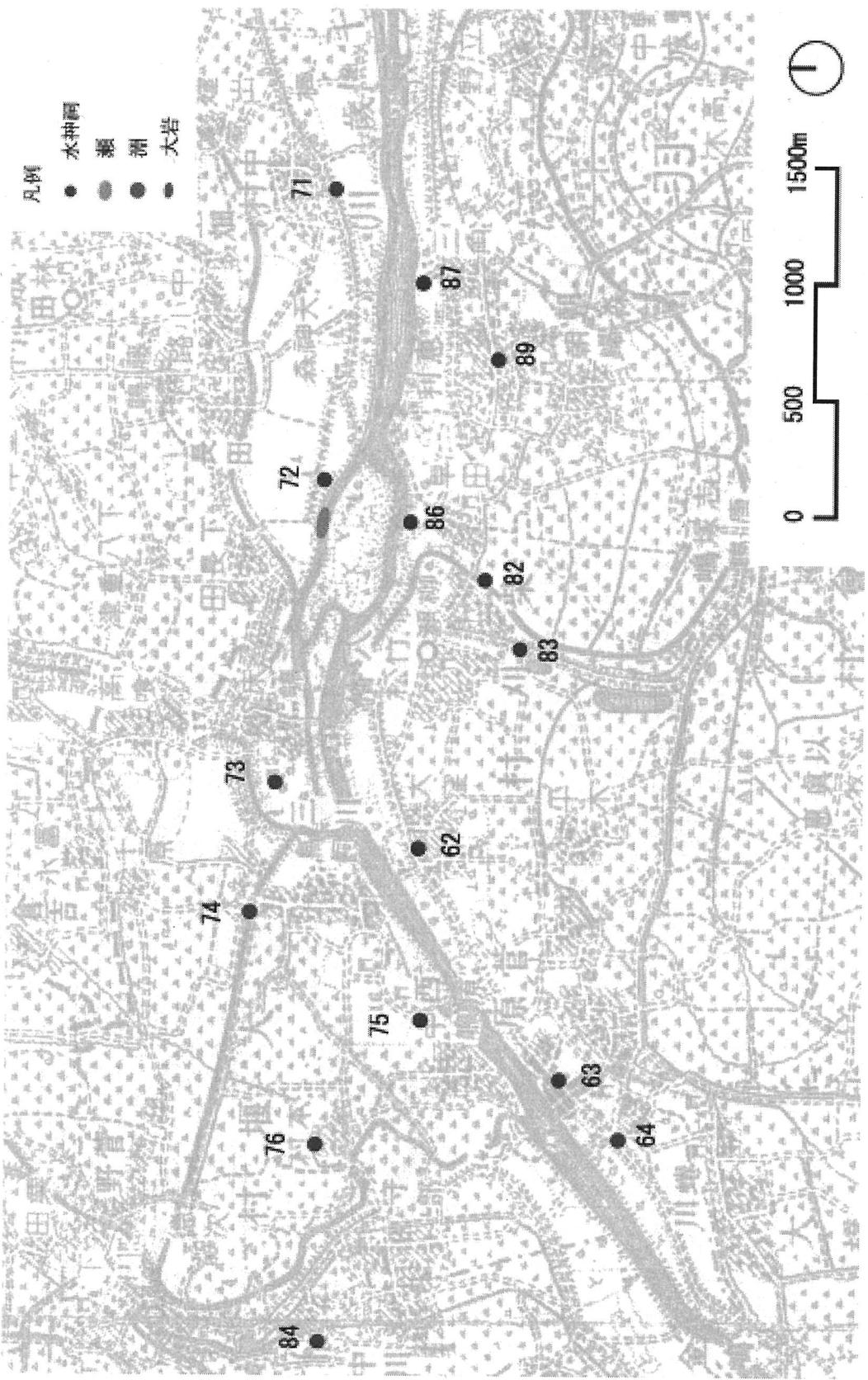
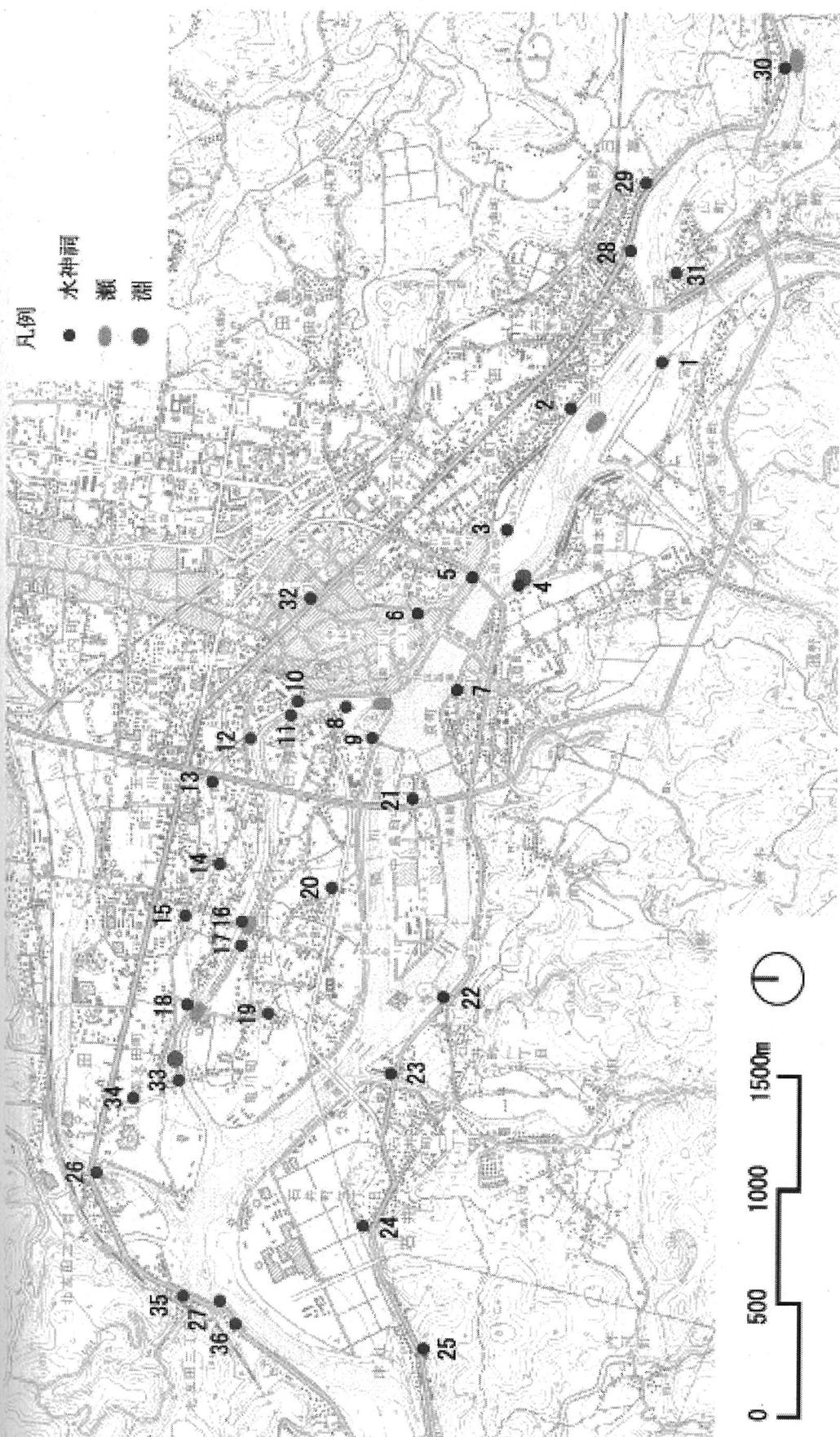


図3.2.4.3 瀬、淵との関係性

図3.2.4.2 濱と淵との関係性



3.2.5 築堤、掘削との関連

筑後川は利根川（坂東太郎）、吉野川（四国三郎）とともに筑紫次郎として「日本の三大暴れ川」に名を連ねるほど大水の被害が多い河川であり、度々水害に悩まされてきた。筑後川の治水工事や用水施設は古く、藩政時代の主要な治水工事として嘉永7年の放水路開削と寛永年間の千栗堤防があげられ、用水路としては大石堰、恵利堰、山田井堰があげられる。また、各藩が筑後川を境界としていたため自己の領土を守るために荒籠によって水勢を弱めるなど、古くから河川に対して人工が加えられてきた⁸⁾。明治以降に行われた河川改修は筑後川の河道に大きく影響したと考えられる。明治19年の第一期改修計画では、金島、小森野、天建寺、及び坂口の4放水路が開削された。筑後川の3大水害の明治22年の大水害を受け、明治29年の第二期改修計画では、天建寺、坂口の放水路の流下断面積を増大し、小森野放水路の拡張を行って氾濫時間の短縮を図った。そして、第三期改修計画では、筑後川3大水害の大正10年の水害を受け、従来の霞堤や、蛇行河川、高潮を解決するため、堤防の拡築、改築、河積の拡張を図り、金島、小森野、天建寺、及び坂口の4放水路を本川に開削して洪水の疎通を図った⁹⁾。

大きく河川改修をする場所は水害が起きやすい箇所だと考えられ、高度な技術がなかつた時代には水害の被害があったと考えられる。そこで築堤、掘削箇所と水神祠の立地との関係性を確認してみた。

築堤、掘削の箇所は、「水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—」に記載されている昭和8年、昭和13年、昭和20年、昭和25年の「筑後川改修の変遷図¹⁰⁾」を参考にした。これは第三期改修計画の時期の変遷図で、このときの改修が筑後川の河道を大きく変化させた改修だと考えられる。図3.2.5.1、図3.2.5.2、図3.2.5.3、図3.2.5.4、図3.2.5.5、図3.2.5.6、図3.2.5.7、図3.2.5.8に水神祠と河川改修箇所の位置関係を示した。

河川改修工事を行った箇所の周辺に立地する水神祠を以下に整理する。

昭和8年

旧堤拡築 【49】【50】【51】【52】【61】【62】【63】【71】【72】

掘削 【64】

築堤 【67】【68】【69】【70】【77】【78】【80】【81】【85】

昭和13年

掘削 【62】【63】【64】【67】【77】【85】

築堤 【52】【68】【69】【70】【71】【72】【78】【80】【81】

昭和20年

旧堤拡築 【51】【52】

掘削 【67】【85】

築堤 【61】【62】【63】【64】【68】【69】【70】【71】【75】【77】【78】【80】【81】

昭和25年

旧堤 【72】

築堤 【62】【63】【63】【71】

以上より、築堤、拡幅が行われたのは以下の水神祠であることが確認された。

【49】【50】【51】【52】【61】【62】【63】【64】【67】【68】【69】【70】【71】【72】【75】【77】

【78】【80】【81】【85】

20箇所の水神祠が築堤、掘削の影響を受けたと考えられ、また、水害が起きやすい箇所だったため水神祠が祀られた可能性も推測される。

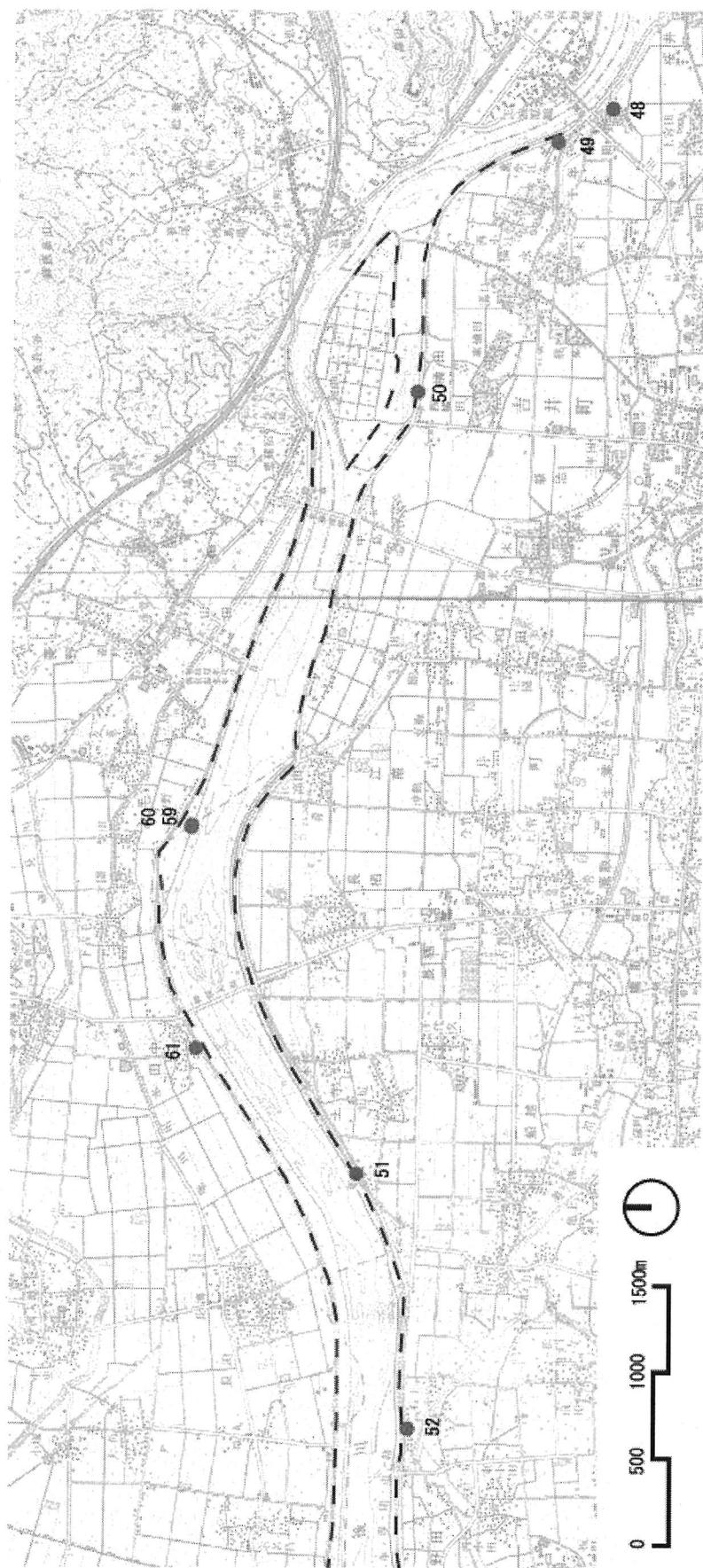


図3.2.5.1 築堤、掘削との関係性（昭和8年）

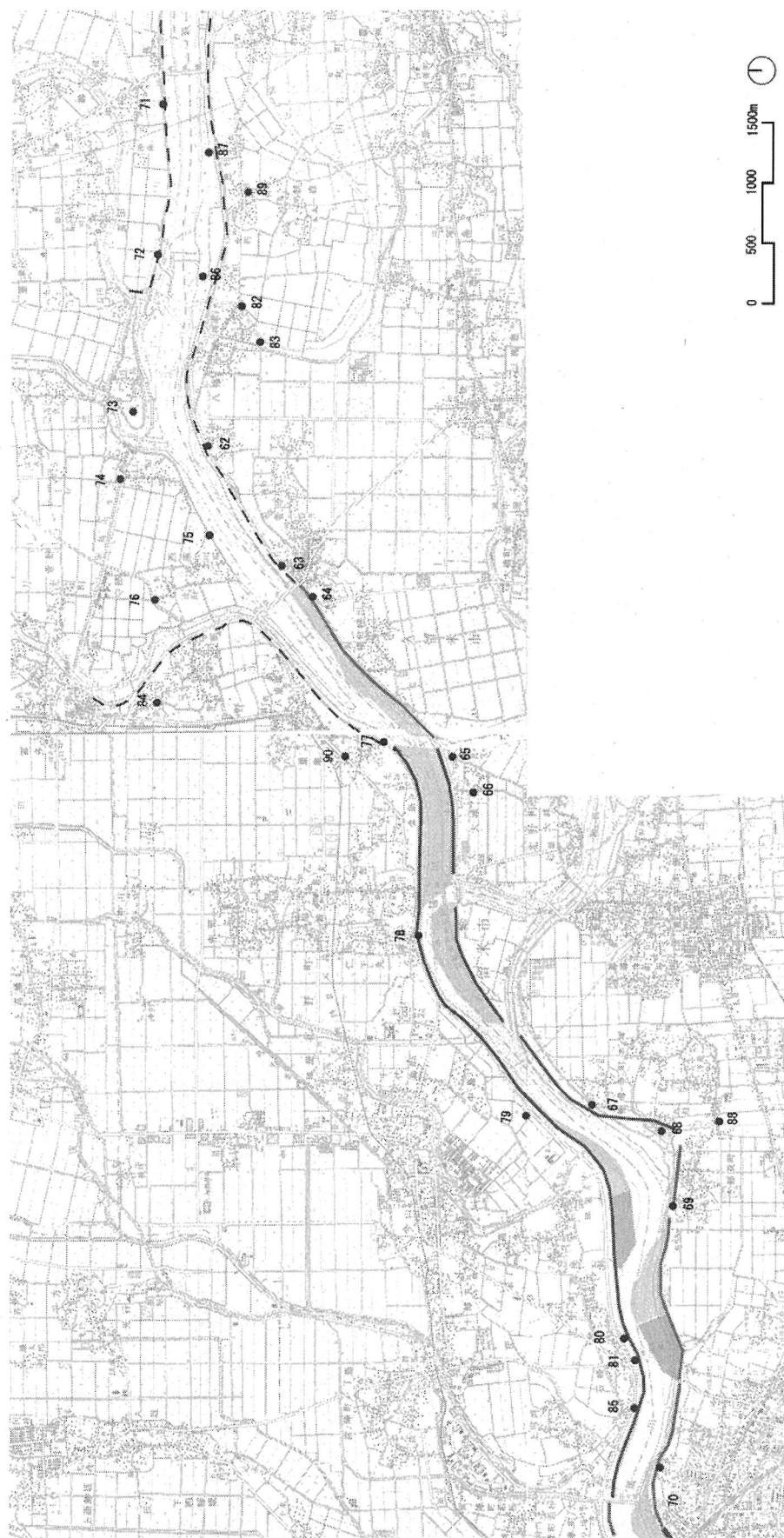
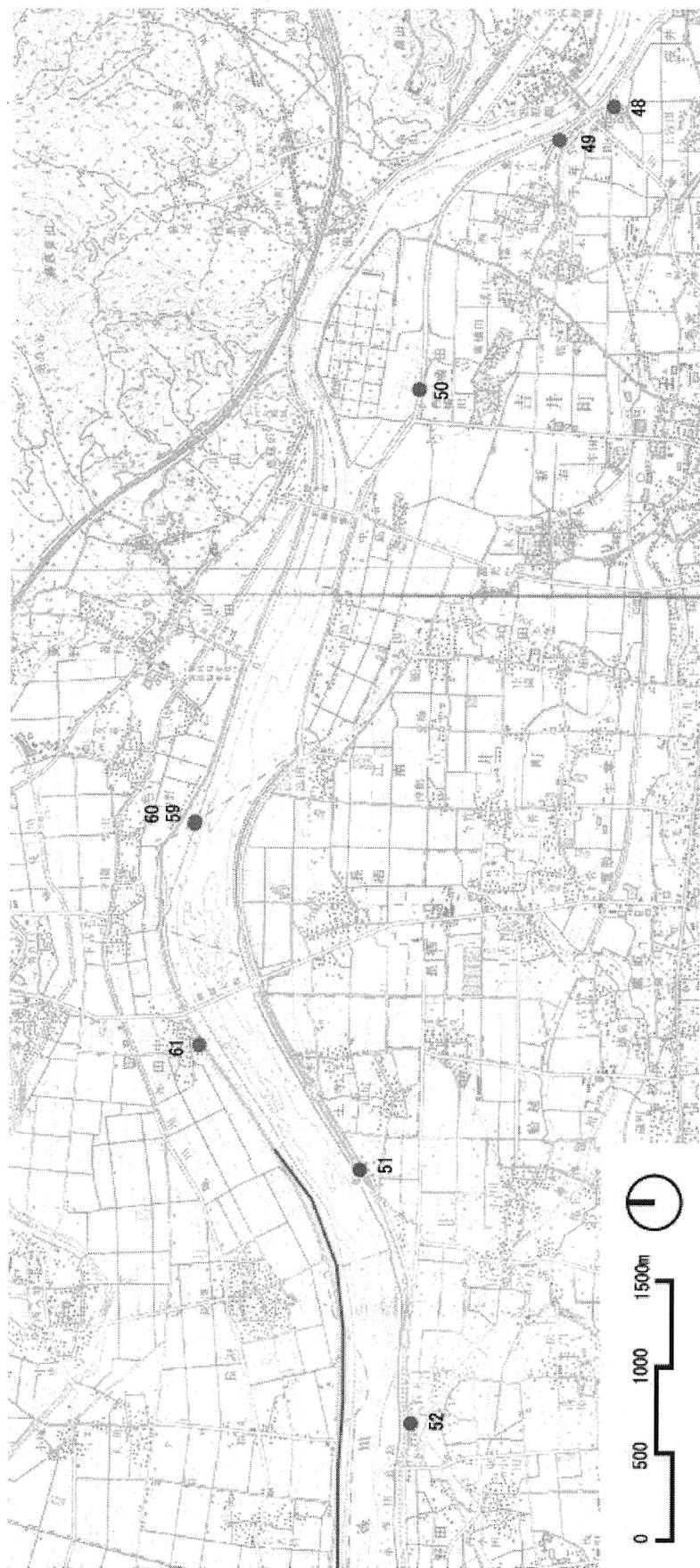


図3.2.5.2 築堤、掘削との関係性（昭和8年）

図3.2.5.3 築堤、掘削との関係性（昭和13年）



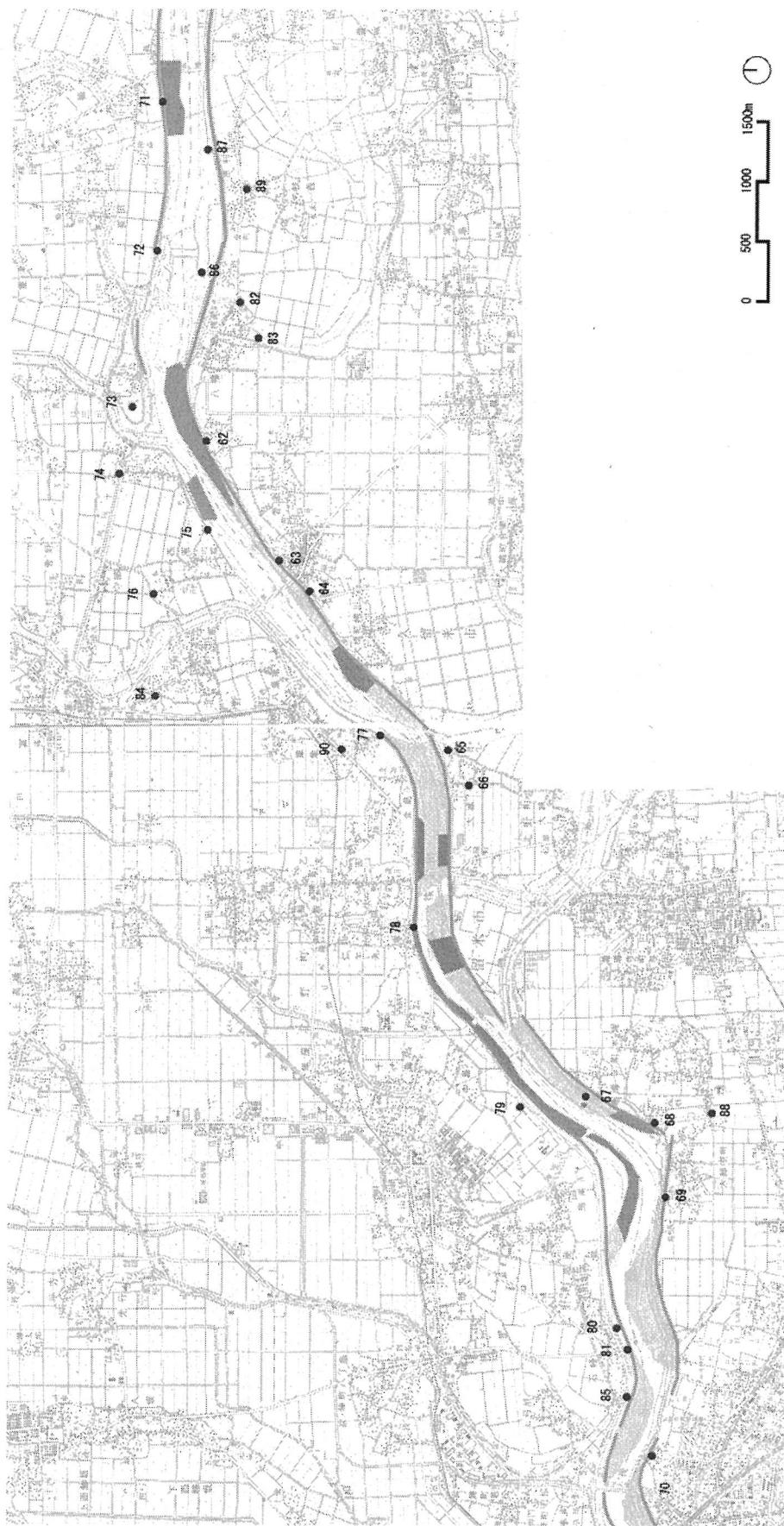
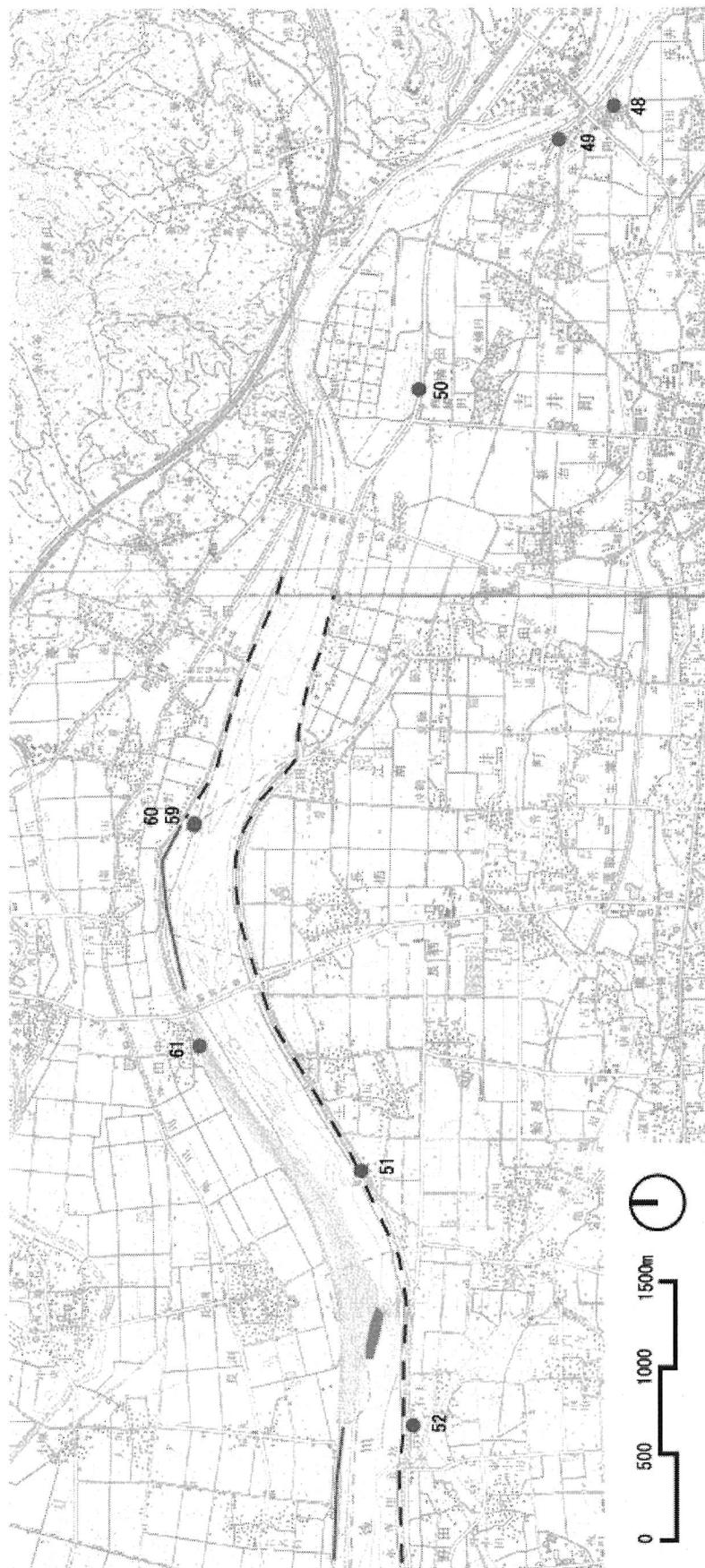


図3.2.5.4 築堤、掘削との関係性（昭和13年）

図3.2.5.5 築堤、掘削との関係性（昭和20年）



0 500 1000 1500m

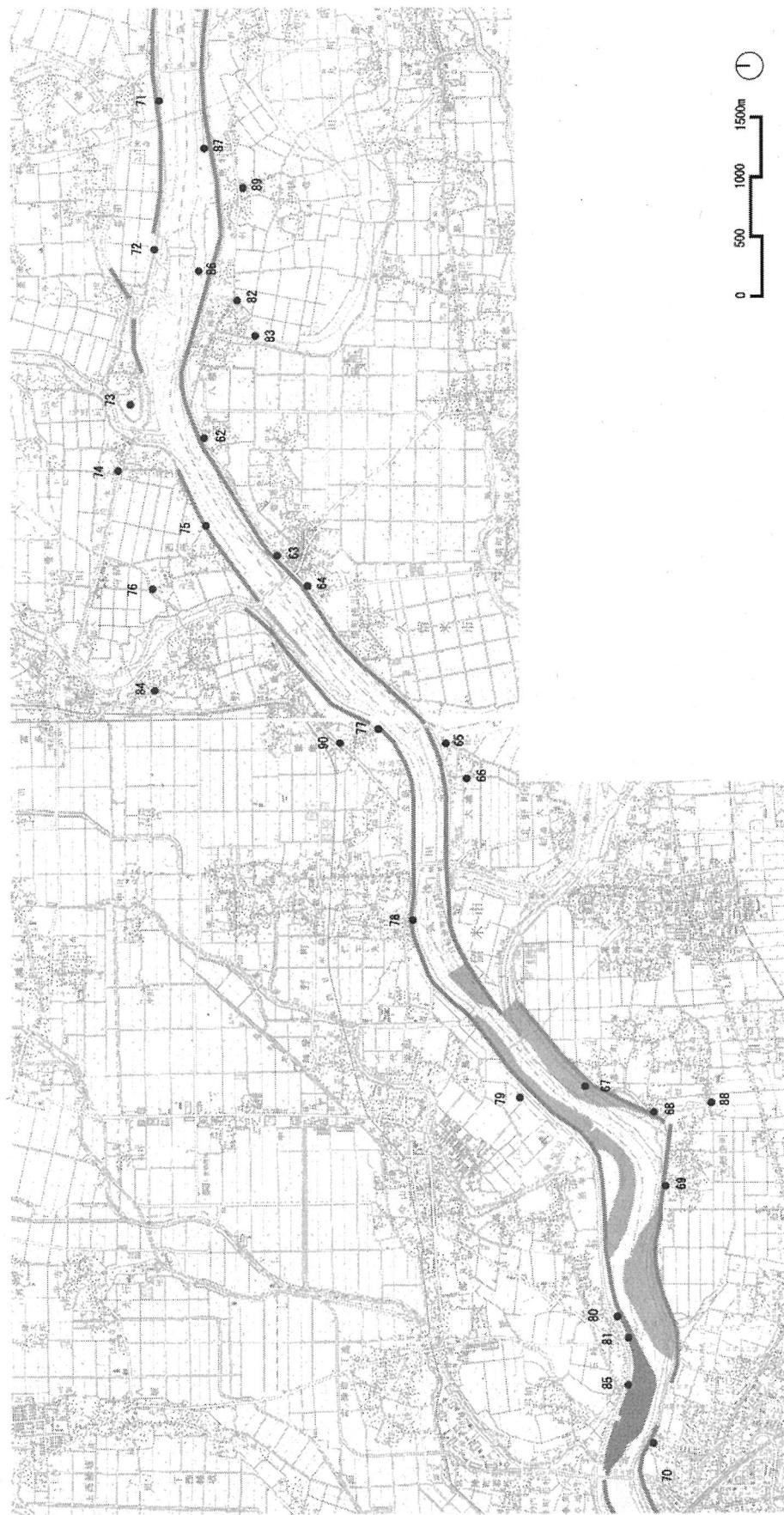


図3.2.5.6 築堤、掘削との関係性（昭和20年）

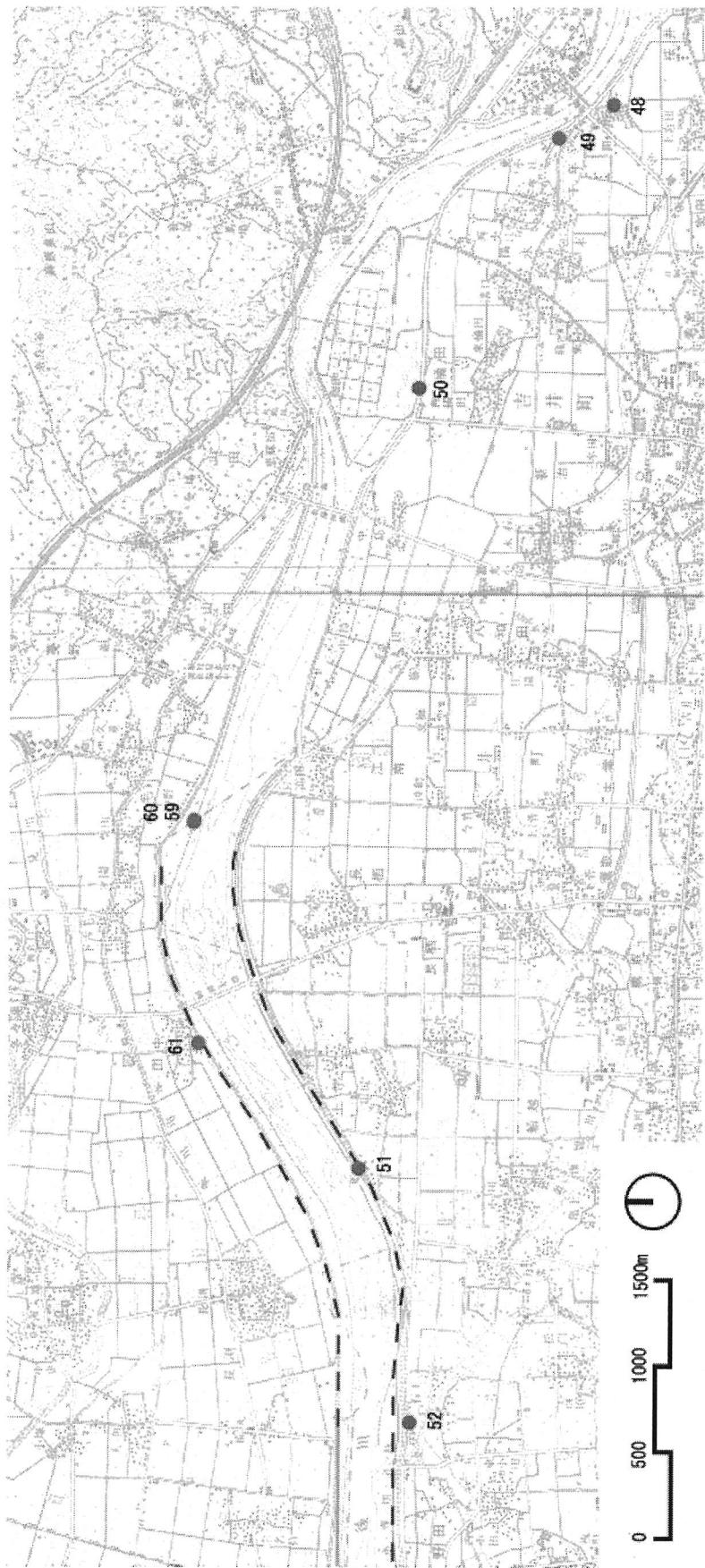


図3.2.5.7 築堤、掘削との関係性（昭和25年）

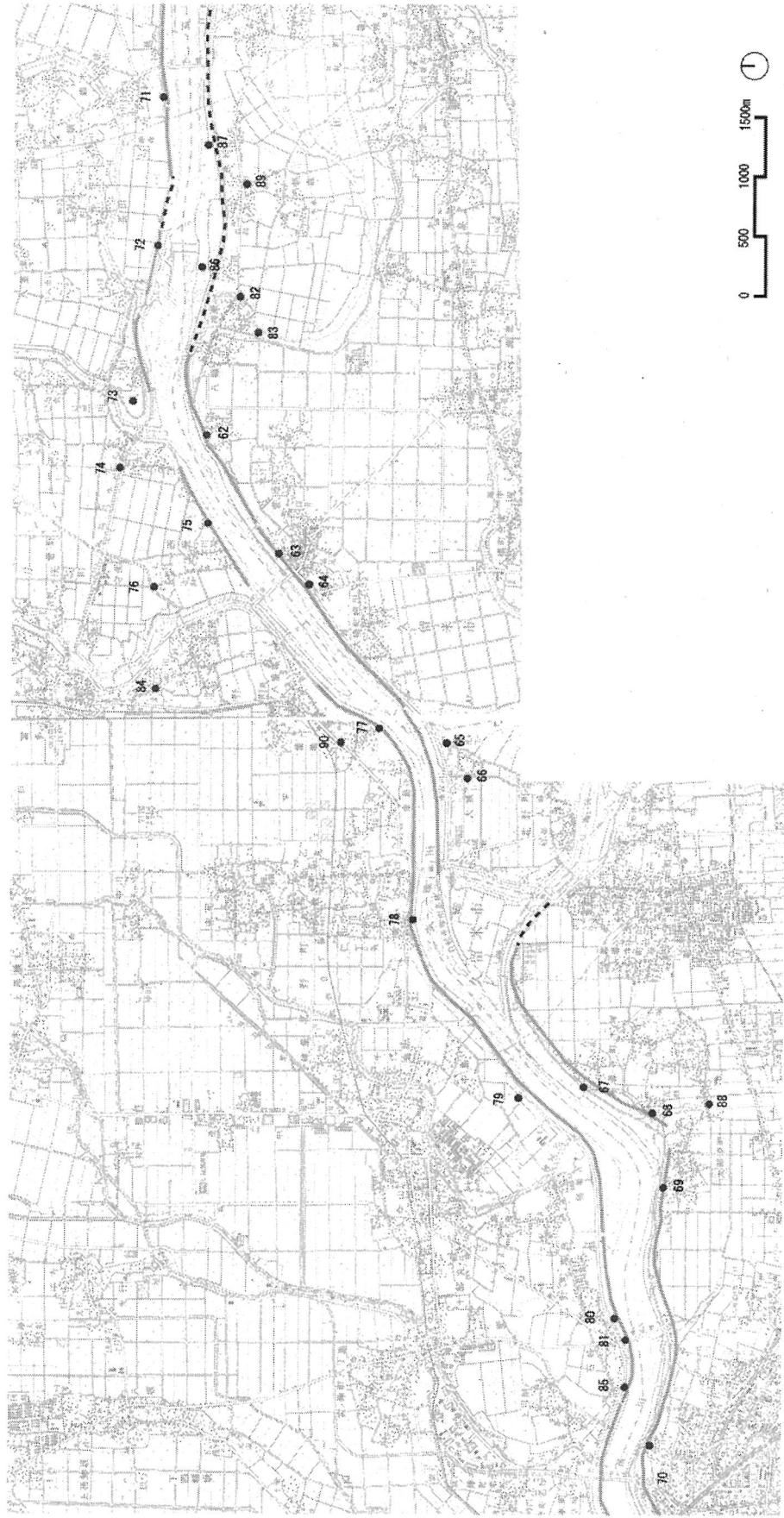


図3.2.5.8 築堤、掘削との関係性（昭和25年）

3.2.6 破堤箇所、決壩堤防箇所、堆積地域、侵蝕地域との関連

明治 22 年 7 月、大正 10 年 6 月、昭和 28 年 6 月に起きた大水害を筑後川の 3 大水害という。大水害の被害を受けた箇所に水神祠は祀られているか、また、この被害箇所は水害の起きやすい箇所だと考えられるので、大水害での被害箇所と水神祠の立地との関係性を確認してみた。

今回は昭和 28 年の大水害の破堤箇所、明治 22 年の水害の決壩堤防の箇所、昭和 28 年の水害の日田で著しく堆積した地域、侵蝕した地域をプロットした。この位置は、「水害地域に関する調査研究第 2 部—筑後川流域における地形と水害型—」に記載されている「昭和 28 年 6 月の洪水の際日田盆地で堆積、侵蝕の著しく行われた地域¹¹⁾」、「昭和 28 年洪水による堤防破堤ヶ所と氾濫堆積図¹²⁾」、「明治 22 年 7 月 5 日大洪水による氾濫図¹³⁾」を参考とした。

破堤箇所として 8 箇所、決壩箇所として 12 箇所、堆積した地域として 2 箇所、侵蝕の著しく行われた地域として 5 箇所プロットした。図 3.2.6.1、図 3.2.6.2 図 3.2.6.3 に水神祠と水害被害箇所の位置関係を示した。周辺に水神祠が確認できたものは、破堤箇所では 4 箇所、決壩箇所では 5 箇所、堆積した地域では 2 箇所、侵蝕した地域では 4 箇所だった。以下に関係した水神祠について整理する。

昭和 28 年の水害の破堤箇所に関する水神祠

【51】明治 22 年の水害の決壩箇所とも位置し、その箇所から上流にこの水神祠は立地する。この付近は水害が起きやすい地域だったことが原因として水神祠が祀られたことが推測される。

【61】刻印から明治 19 年に建立したことが確認され、昭和 28 年の水害がとの関係性は低い。しかし、この破堤箇所は、第三期河川改修で堤防を改修していたにも関わらず、その後の昭和 28 年の水害により破堤している。つまり、水害が起きやすい箇所であることが推測される。さらに、弘化 3 年の筑後川絵図にもこの水神社として描かれており、弘化 3 年から祀られていることが考えられ、元来、この土地は水害の被害を受けやすい地域であり、それが原因で水神祠を建立した可能性が考えられる。

【72】水神祠の建立年は不明である。第三次改修で築堤しているにも関わらず破堤している。元来、水害が起きやすい地域のため、水神祠を建立した可能性が考えられる。

【89】水神祠の建立年は不明である。第三次改修で築堤しているにも関わらず破堤している。元来、水害が起きやすい地域のため、水神祠を建立した可能性が考えられる。

明治 22 年の水害に関する水神祠

【46】この水神祠の刻印から明治 26 年に建立されたことが確認された。つまり、この水神祠は、この周辺で明治 22 年の水害の被害を受けたことが理由で建立されたということが推測される。

- 【50】この水神祠の建立理由には童子丸池が深く関わっていることが推測される。
- 【51】決壊箇所の上流に立地している。刻印より明治 12 年に建立したことが確認でき、この災害との直接的な関係な確認できなかつた。
- 【83】水神祠の建立年は不明であるため、明治 22 年の水害との直接的な関係性は確認できなかつた。しかし、この場所は「鬼ころし」と呼ばれ筏下りの難所とされていた。水神祠の隣に鬼ころしの石碑があり、さらに、早田村には恵利堰に関わる人柱の伝承をはじめ筑後川に関連し伝承が多く伝わっていることが確認された。
- 【86】水神祠の建立年は不明であるため、明治 22 年の水害との直接的な関係性は確認できなかつた。

日田での昭和 28 年の水害に関する水神祠

掘削

- 【1】元々は田の中を通る道沿いに祀られていたが、昭和 28 年の水害により田ごと流されてしまった。水害後、田を整備した跡に現在の場所に大宮の集落により水神祠が再建されたそうである。刻印から昭和 37 年に建立したことがわかり、水害後に再建されたものであることが確認される。
- 【3】元来、この辺りに祀られており、水害前の立地は図の位置だったことが確認される。28 水により流されたことがヒアリングより確認された。刻印から昭和 45 年に建立したことがわかり、水害後に再建されたものであることが確認される。
- 【7】
- 【21】元来、中ノ島公園辺りに集落があり、水神祠も中ノ島公園付近に祀られていた。昭和 28 年の水害により集落ごと被害を受け流されたそうである。水害後、現在の位置に集落、水神祠に場所を移したことが確認できた。
- 【28】

堆積

- 【19】元来、この水神祠はこの水神祠を管理する集落の北を流れる庄手川沿いに立地しており、【18】の水神祠と川を挟んで対になっていたことがヒアリングより確認された。昭和 28 年の水害により水神祠は流されてしまい、集落の人々が水神祠を探したようで、見つけた水神祠を現在の場所に祀ったことが確認された。現在祭っている場所は、この集落が氏子となっている酒楽神社にまつわる池の側ということが理由と、川沿いでまだ流される可能性があるという理由から現在の地に祭っているそうである。
- 【20】元来、この場所に水神祠が祀られ続けており、昭和 28 年の水害では水が集落まで上がりつて被害を受けたことが確認できた。

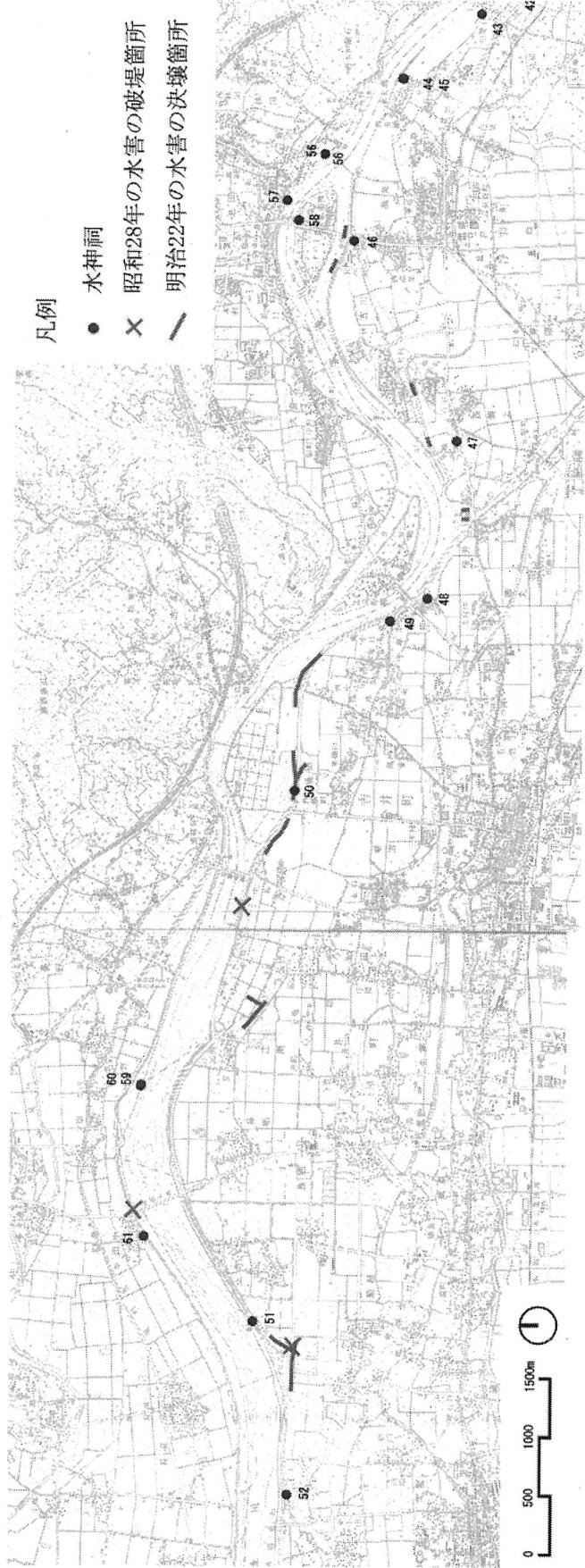


図3.2.6.1 水害被害箇所との関係性

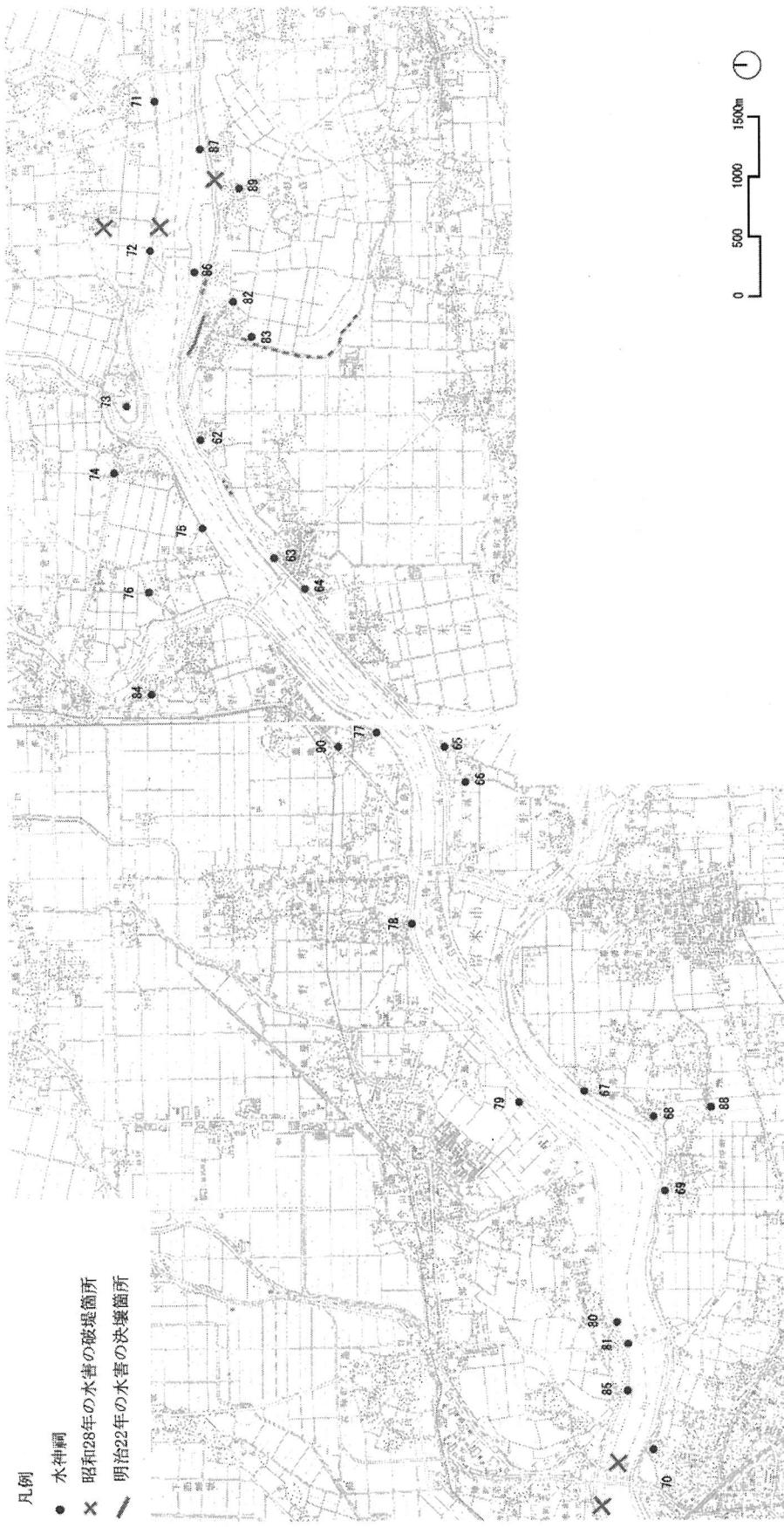


図3.2.6.2 水害被害箇所との関係性

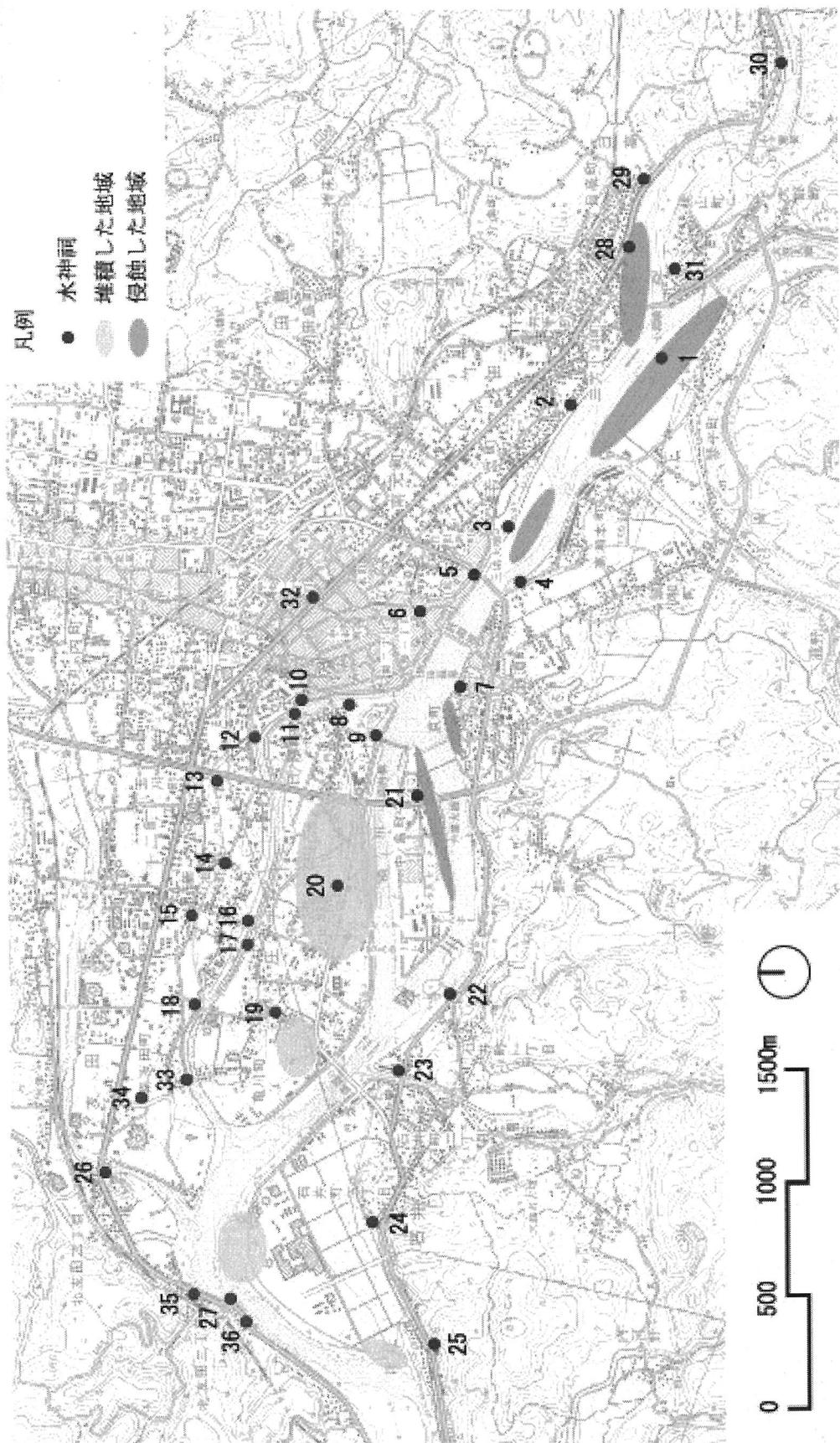


図3.2.6.3 水害被害箇所との関係性

3.2.7 分析結果のまとめ

分析を行った結果、全体のうち56箇所の水神祠では、渡しなどの水利用のあった場所や、洪水などの被害のあった場所の近くに位置していることを確認した。このことから、水神祠の立地する場所は、渡し、舟運などの水利用のあった場所や、洪水などの災害がおこった場所近くに位置することを確認した。

第三章 参考、引用文献

- 1) 筑後川河川事務所、筑後川流域基礎情報—筑後川ハンドブック—、pp.12.13、2004
- 2) 筑後川河川工事事務所、筑後川歴史散策 治水・利水編、pp.3
- 3) 久留米文化財収蔵館所蔵、筑後川絵図 甲・乙
- 4) 日田市、日田市史、付録絵図 日田郡絵図（会所控）、1990
- 5) 筑後川河川工事事務所、筑後川歴史散策 治水・利水編、pp.3
- 6) 筑後川河川事務所、筑後川流域基礎情報—筑後川ハンドブック—、pp.359、2004
- 7) 筑後川改修規成同盟会、筑後川とともに、pp.43-46、2006
- 8) 筑後川改修規成同盟会 筑後川流域利水対策協議会、筑後川の流れとともに 筑後川の利水と治水、pp.83、1996
- 9) 科学技術庁資源局、水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—、pp. 39、1957
- 10) 科学技術庁資源局、水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—、pp. 40、1957
- 11) 科学技術庁資源局、水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—、pp. 18、1957
- 12) 科学技術庁資源局、水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—、pp. 37、1957
- 13) 科学技術庁資源局、水害地域に関する調査研究第2部—筑後川流域における地形と水害型—、pp. 34、1957

第四章 結論

第四章 結論

4.1 本研究の結論

本研究では水神祠に着目し、水神祠の立地要因の考察を行うことで人々の暮らしと川との関係性の読み解きを行った。本研究では立地調査およびヒアリング調査により、分析する水神祠の年代、管理者など基礎的な情報を収集し、その後、立地要因についての分析を行った。

現地調査から、筑後川沿いには水神祠が91箇所分布することが確認でき、分布をみると、水神祠は上流に分布しており、下流の感潮区間には水神祠が存在しないことが明らかとなつた。年代をみると、最も古いものは1799年に建立されており、この年代から建立されてきたことが確認された。また、年代が比較的新しいものは再建されたものが多いことから、水神祠は年代以前からその場所に存在していた可能性が考えられる。また、祭神、祭祀上の特徴を見るとその分布に地域性があることが確認できた。祭神として、水天宮が57箇所と多く祀られており、久留米にある水天宮の総本山があることが関係し、筑後川では水天宮信仰が広まっていることが確認された。祭祀上の違いでは、石と祠があり、石で祀った形が日田に密集していることが確認された。また、ヒアリング調査より、水神祠は集落により管理されているものが81箇所で確認でき、集落によって多くの水神祠が管理されていることが確認された。

現地調査で収集した情報から以上のことことが明らかとなつた。しかし、水神祠の謂れに関しては明らかにすることができなかつた。そこで、水神祠の立地要因を明らかにするための分析を行つた。

集落との関係性を見ると、集落を管理する水神祠は80箇所あり、位置関係をみると、79箇所の水神祠がプロットした集落の近くに立地しており、多くの水神祠では、近くにはそれを管理する集落が立地しているということを明らかにした。

渡しとの関係性を見ると、両岸に水神祠が立地している渡し場が2箇所存在した。このことから、渡しの両岸には人々水神祠が祀られていたという可能性を考え、明治33年の旧河道を現在の地形図に重ね、河道の変化を確認した。すると渡し場で水神祠がない側の8箇所で河道の変化が確認できた。このことから、水神祠は河道変化により移設された可能性があることを指摘した。

川港、筏場、筏宿との関係性を見ると、川港を3箇所、筏場を2箇所、筏宿を6箇所プロットしたところ、水神祠の立地と一致したのはそれぞれ3箇所、2箇所、3箇所だった。このことから、舟運の拠点となる地域と水神祠に関係性があることが確認された。

瀬、淵との関係性を見ると、瀬、淵、大岩はそれぞれ21箇所、5箇所、11箇所プロットし、水神祠の立地と一致したのは8箇所、3箇所、4箇所であった。このことから、川の中で危ない場所とされる瀬、淵と水神祠に関係性があることを指摘した。

築堤、掘削の関係性を見ると、第三次改修の影響を受けたと考えられる水神祠は20箇所

で、これらは水害が起きやすいために祀られた可能性を指摘した。

破堤、決壊箇所、堆積、掘削箇所破堤箇所との関係を見ると、破堤箇所を 8 箇所、決壊箇所では 12 箇所、堆積した地域では 2 箇所、侵蝕した地域では 5 箇所プロットした所、水神祠の立地と関係したのは、それぞれ 4 箇所、5 箇所、2 箇所、4 箇所だった。また、【46】の水神祠は明治 22 年の水害の決壊箇所と一致し、さらに刻印を確認すると明治 26 年に建立されたことから、これは明治 22 年の水害の被害を受けて建立されたということが推測される。このことから、水害の被害と水神祠に関係性があることを指摘した。

以上のことから、水神祠は、渡しなどの水利用のあった場所や、洪水の被害があった場所の近くに立地し、水神祠は人と川との関係を読み解く手段になると考えられる。

4.2 今後の課題

本研究では筑後川に分布する水神祠に着目し、人々の暮らしと川との関係性の読み解きを行っていったが、解明しなければならない点が多数残っている。

本研究では現地調査における水神祠の位置情報、祭神、祭礼の特色、過去の治水利水の歴史などを照らし合わせることによって、水神祠のおおよその立地要因を推測するにいたったが、それぞれの水神祠に対する明確な立地要因までは解明できなかった。本研究で得た水神祠の立地要因を参考に、現地で今回の調査以上に詳細に文献調査、ヒアリング調査を行う必要がある。

また、本研究で河道変遷により水神祠が移設された可能性があることを指摘したが、移設された水神祠の現在の状況については解明できなかった。本研究より、多くの水神祠は集落により管理されていることが明らかとなったので、今後は、河道変遷と集落についての調査を行い、かつて水神祠があった可能性がある場所に関して明らかにする必要があると考えている。

また、水神祠の特徴には地域性があることは明らかにできたが、地域区分で分類することや、地域による差異の理由までは明らかにできなかった。現在確認できる水神祠の特徴から、その水神祠の周辺の地域では人々と河川空間にどのような関係性があったのか読み解くための整理を行う必要が考えられる。

本研究では筑後川に多く分布する水神祠を例として読み解きを行ってきたが、本研究はまだ未完成な状態である。今後さらなる調査により信憑性を高め、水神祠を通して、筑後川における人々の暮らしと川との関係を読み解いていきたい。

謝辞

本研究を作成するにあたり、本当に多くの方々に助けていただきました。最後にその感謝の意を述べたいと思います。

本研究では水神祠の調査を行う中で、多くの人々に大変お世話になったと感じています。地域の方々のヒアリングによりこの研究は構築されています。私のような学生が突然やってきて水神祠についてお尋ねしても、それに快く答えていただいて本当に助かりました。一番初めにヒアリングをしたときは不安と緊張で一杯だった私も、暖かい人々との出会いもあり、徐々に気軽にお話しできるようになったと感じております。散歩している方、農作業している方、水神祠の側に住んでいる方、近くのお店の方、長年地域に住んでいる方、宮総代の方、区長さん、宮司さんなど、この研究での人との出会いは多種多様、一期一会だったと感じます。文献からはわからない、そこに住む人に聞くことでわかることが多くあり、ある時には詳しい方を紹介していただき、またある時は参考になる資料を家の奥から引っ張り出して提供していただく時もありました。筑後川沿いを自転車で駆け回り大変だったこともありましたが、中には、いつでも来ていいよ、と優しく接してくださる方もいらっしゃり、そうした方々との出会いはこの研究の楽しみでもありました。この水神祠に関するデータはご協力いただいた皆様のおかげで積み重なっていきました。このように研究を続けていたのも皆様が暖かく迎え入れていただいたお陰です。本研究は未完の状態で、この研究は今後さらに調査を行っていくことを考えております。わざわざ時間をとってお話し頂きお世話になった分に対し、この恩に報いることができるようこれからさらに深みを持った研究についていきたいと考えております。今回お世話になった方々、本当にありがとうございました。今後またお世話になる機会がありましたらよろしくお願ひ致します。

また、本研究を進めるにあたり、樋口准教授には、論文のテーマを決めるきっかけから、この研究の意義、研究の進め方、様々な指導をしていただきました。今考えてみると、初めの頃はこの研究の本当の意義について理解していなかったということを身に沁みて感じます。高尾特任助教には、初めての論文にあたり、まだ研究とは何なのか、私の興味があることは何なのかもわかっていない頃に小ゼミをしていただき、研究を進めるにあたり多くのアドバイスをいただきました。これから二年間、この研究室でまだまだお世話になりますが、今後ともご指導をよろしくお願ひ致します。

また、同研究室の羽野暁氏、榎本翠氏、西村奈美氏、深川毅一氏、小川正人氏、石井圭祐氏には論文のみならずこの一年間お世話になりました。何も出来ない私に対し、数々の助言、手助けをしていただき、最も身近で頼りになる存在でした。卒論の発表の練習も、最後の最後まで付き合っていただきありがとうございました。このメンバーで過ごせなくなると考えると寂しく思います。しかし、逆にその分、これから今まで以上に精進してい

こうと考えています。ありがとうございました。

最後に、このように大学四年間を過ごすことができたのも、ここまで育て、支援して下さった両親のおかげです。ありがとうございました。実家にもあまり帰っておらず心配をかけることもあるかと思いますが、これからさらに二年間、大学院に進学し、まだ少し迷惑をかけると思います。このように自分のやりたいことができるのも両親の支援があるからです。これからもよろしくお願い致します。

本研究にあたり、ご協力いただいた全ての方々に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

平成24年3月吉日

平野 哲也